

## 中学校開校10年の検証と、今後の展望

### － 今後の10年の大口中学校の歩みを描く －

新生大口中学校が開校して、10年が経つ。

この検証報告書は、大口中学校の生徒と教職員が築いてきた10年間の歩みから、その成果を確認し、共有することを第一の目的とする。

また、今後の10年を進むうえで、現状の課題を整理し、確たる学校づくりに生かす指針を得ることを第二の目的とする。

そして、10年間の成果と課題をもって、これからの10年間で、大口中学校がどのような方針のもとで生徒を育てていくのか、その展望を明らかにすることを、最大の目的とする。

この検証報告書は、教育委員会が作成し、学校運営の指針を示すものであるが、地域社会の一般の方にも学校運営の方針をお知らせできるように意図して作成した。

「大口の子は大口で育てる」ために、学校・家庭・地域が今後の大口中学校の展望について共有する指針としたい。

大口町教育委員会

2019年3月

---

大口中学校は、次のような指針をもち新しい10年の教育活動を創造します。

---

- ① 教育目標「豊かな心とたくましい体をもち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒を育成する」ことを大口中学校の最上位の目的とし、「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を創造する。
- ② 「教科センター方式」は、「生徒に最適な学習環境を提供するため、『授業』を中核に据えた学校運営方式」と定義する。「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を具現化するための手段であり、これを通して教育目標を達成することを目的とする。
- ③ 「ブロック活動」は、「自治・自浄能力を学ぶ場を提供するために行う、異学年で行う自治的活動」と定義する。「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を具現化するための手段であり、これを通して教育目標を達成することを目的とする。
- ④ 教育活動の見直し・改善は連綿と継続する。その視点は、学校の上位目的から外れていないかの観点で進め、“当たり前”とされてきたことについても、「目的」の本質を見極め、適切な「手段」を考え抜く必要がある。
- ⑤ 地域社会に開かれた学校を目指す。また、地域と協働して教育課題を解決できる体制づくりを進める。

## 目 次

### 第1章 大口中学校って、どんな学校ですか。(Q&A方式で)・・・1

- 1 大口中学校は、教科センター方式の学校です。
- 2 大口中学校は、ブロック活動が盛んな学校です。
- 3 大口中学校は、大口町の生涯学習活動の拠点です。

### 第2章 大口中学校の“うわさ話”に答えます。(Q&A方式で)・・・7

#### I 生活編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

- 1 教室移動で子どもが疲れてしまうって話を聞くけど、どうなの？
- 2 教室移動で授業に遅れてくる子がいるって話だけど。
- 3 移動するのに時間がかかるのでトイレにも行けないっていうけど。
- 4 先輩が怖くて、トイレに入れられないだけど。
- 5 教室移動で一人ぼっちになって寂しがっている子がいるって聞くけど。
- 6 自分たちの教室がないので、学級としての一体感がわからないだけど。
- 7 自分の机がないので、居場所がない。それが不登校が多い原因じゃないかな。
- 8 教師が教科教員室に分かれているので、職員間の連携が不足しているのでは。

#### II 学習編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

- 1 大口中学校の学力は低いの？
- 2 教科センター方式のせいで、生徒が落ち着いて学習に取り組めないんじゃないの？
- 3 教科センター方式って、生徒が教室移動しているだけで、あんまり意味がないんじゃないの？
- 4 教科ラウンジって、あんまり活用されていないんじゃない？
- 5 教科教員室が近くにあるのは、いつでも質問できるからという話だけど、教室移動の為、質問する時間がないだけど。
- 6 授業中に寝ている子が多いって話を聞くけど。

Ⅲ	ブロック活動編	23
1	縦学年の教室配列の為、同学年の友達ができにくいんだけど。	
2	先輩が怖いんだけど。	
3	ブロック活動って、何やっているの？	
4	ブロック活動の時間のせいで、授業の進度が遅れているんじゃない？	
5	ブロック宿泊研修って、1泊する意味があるの？日帰りでもいいんじゃない？	
6	ブロック活動に時間をかけているけど、意味あるの？	

第3章 大口中学校10年の成果と課題を説明します。・・・31

- 1 大口中学校が目指してきたこと
- 2 「教科センター方式」の成果と課題は何か
- 3 「ブロック活動」の成果と課題は何か

第4章 大口中学校の今後の10年の展望を明らかにします。・・・35

- 1 大口中学校の「最上位の目的」は何か
- 2 「最適な手段」は何か
- 3 今後の10年の展望を明らかにする

(資料編)・・・43

- 1 検証報告書作成までの経緯
- 2 教科センター方式・ブロック活動に関するアンケート
- 3 ブロック活動で身に付けたい力  
(大口中学校作成 ブロック活動の振り返り用紙：3年生)
- 4 「ブロックの日」におけるブロック長の説明原稿  
(大口中学校ブロック長作成 2019年2月21日実施)

## 第1章

大口中学校って、どんな学校ですか。

第1章では、「大口中学校って、どんな学校ですか？」という標記の問いに対して、3つの回答でお答えします。この3つの回答が、大口中学校の特色であると言えます。

1 大口中学校は、教科センター方式の学校です。

① 教科センター方式って、生徒が教室を移動する方式のことでしょ？

教科センター方式は、「生徒が教室を移動する方式」であると、しばしば言われています。でも、教科センター方式ではない、通常の中学校でも、生徒は教室を移動します。具体的には、理科の授業を受けるために理科室に移動する、技術科の授業を受けるために技術室に移動するなど、中学校 9 科目のうち、理科・音楽・美術・技術家庭・保健体育の 5 教科は、生徒がそれぞれの教室に移動して授業を受けます。なぜ移動するのかというと、その教科に適した学習環境が、その教室で整っているからです。これが、大口中学校では、残り 4 科目である、国語・数学・社会・英語においても、生徒が教室を移動します。なぜなら、移動したその教室は、国語や数学を学習するのに適した環境になっているからです。

② その教科の学習に適した教室とは？

では、「その教科に適した学習環境が整っている教室」とは、どのようなものでしょうか。例えば技術室なら木を切断する作業がしやすいように作業台のある教室、理科室なら実験に使用する薬品や器具が備わっている教室、というようなイメージは持ち得やすいと思われます。では、国語の学習をするのに適した教室とはどのようなものでしょうか。

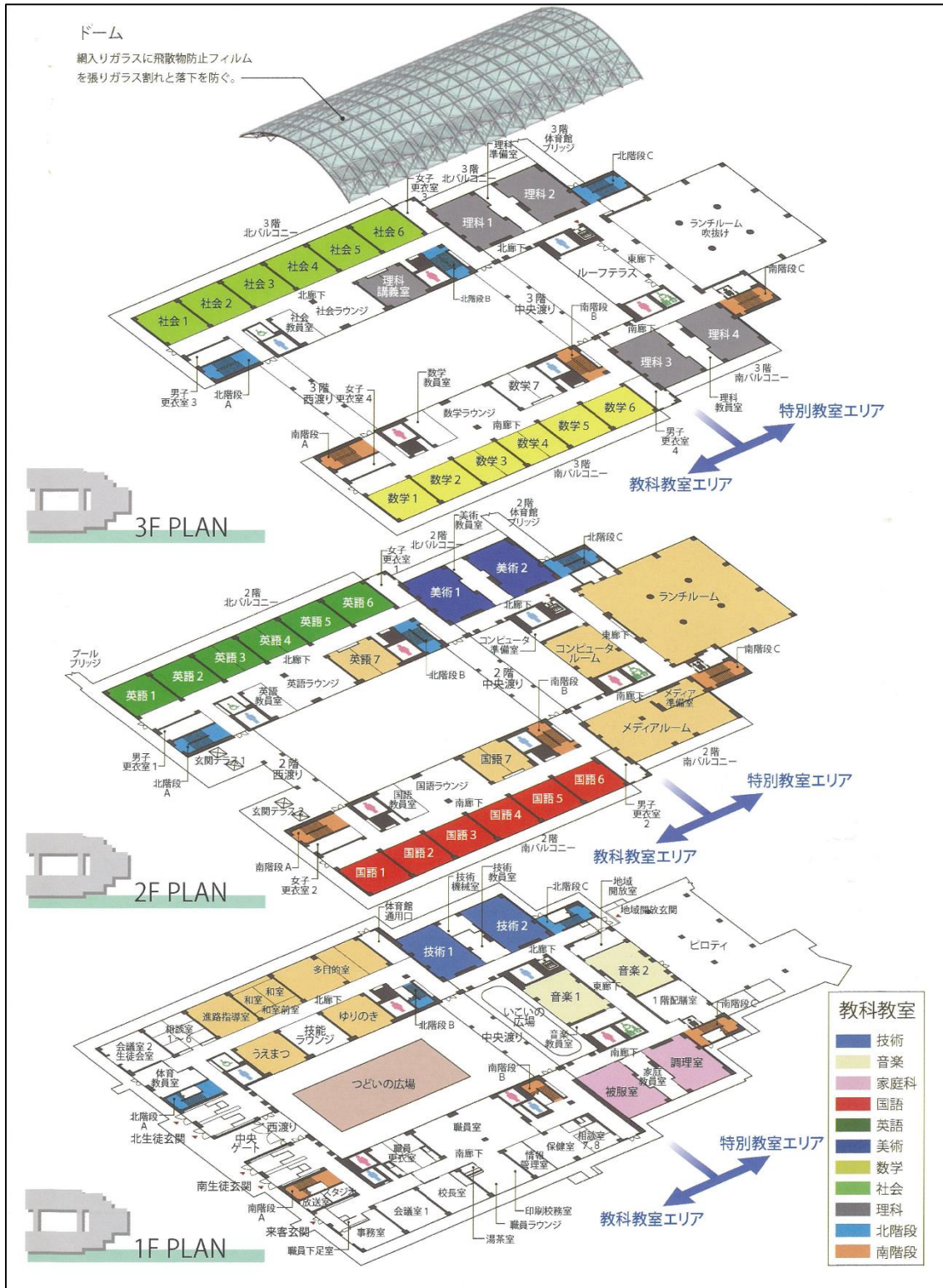
次ページは、大口中学校の教室配置図です。

国語教室がどこにあるかと探しますと、南館 2 階に「国語 1 教室」から「国語 7 教室」までが、まとまって配置されていることが分かります。このような教室配置のもと、例えば、国語 1 教室では 3 年生の生徒が「おくのほそ道」の学習を、国語 2 教室では 1 年生の生徒が「竹取物語」の学習を、同じ授業時間に学習をしています。つまり、その時間において南館 2 階の空間は、古典の世界に浸る空間として共有されています。このように教科ごとにまとめて教室配置をすることで、その教科固有の学習空間を創りだし、生徒の学びに向かう力を引き出そうとしているわけです。

③ 国語ラウンジって何？

次ページの教室配置図を見ると、国語 3 教室と国語 4 教室の前に「国語ラウンジ」というオープンスペースがあります。このオープンスペースには、国語科関連の図書・資料や生徒作品の展示がなされ、国語の授業を学びに来た生徒たちの学習意欲を喚起したり支援したりする、教材教具や掲示物が展示されています。国語の授業を学ぶために南館 2 階に移動してきた生徒たちを、国語の環境に誘う場所であると言えます。

# 大口中学校教室配置図



#### ④ 国語教員室って何？

前ページの教室配置図を見ると、国語ラウンジの横に「教科教員室」という部屋があります。この部屋は、国語科教員の執務場所となっており、国語ラウンジにいる生徒は、授業に関する質問を気軽に尋ねることができます。一般的な学校にはこのような教員室はありませんので、教員に質問するためには、職員室に行かなければなりません。大口中学校におけるその環境は、大変恵まれていると言えます。

#### ⑤ 教室の垣根を越えて

教科ごとに教室がまとまって配列されていることの利点として、教科における教員間の連携が図られるということが挙げられます。

どの中学校でも、例えば国語科教員の場合、5人程度の教員がいます。それぞれの教員は、自分が担当する学年学級の教室に出向き、授業を行うわけですが、5人の指導内容や指導方法は、ともすると教員個々の裁量に委ねられ、情報連携が十分に図られない問題点が指摘されています。しかしながら、国語教員室のある大口中学校では、日常的に国語科教員の情報交換が図られ、その結果、国語科教員がチームとして全ての学年学級の教科指導に当たるといふ、体制を整えることができます。

#### ⑥ 教科センター方式とは何か？

以上のことから、教科センター方式とは、単に、「生徒が教科の教室に移動する方式」ではなく、生徒に最適な学習環境を提供するために、「教科指導を中心に据えた学校運営の方式」であると定義することができます。

クラス数だけの普通教室を用意し、特別教室を組み合わせれば出来上がりというのが、従来型の中学校の計画でありました。これに対して、教科センター方式は、「生徒に最適な学習環境を与えたい」という大口町民の志によって創られたものであります。教科センター方式は、従来型の中学校では、行いたくてもできないものです。大口中学校だからこそ、実現が可能な方式であると言えます。



## 2 大口中学校は、ブロック活動が盛んな学校です。

大口中学校の特色として、「ブロック活動」が挙げられます。ブロック活動とは、「異学年集団で行う自治的活動」のことです。学校生活の多様な場面において、1年生から3年生までが協働して活動にあたるというプログラムが教育課程に組み込まれています。

大口中学校の教科センター方式は、「異学年交流型教科センター方式」と呼んでいます。この名前の通り、ブロック活動は、教科センター方式を行うために欠かすことのできない、いわば車の両輪ともいうべき活動です。具体的には、第2章Ⅲ「ブロック活動編」で述べていきますので、後述をご参照ください。ここでは、ブロック活動を学校経営の特色として掲げた理念について述べていきます。

大口中学校は、開校時に、一つの志を立てました。それは、「これまでの学校像を“模写”した学校ではなく、新しい学校を創ろう」というものです。そして、その新しい学校のコンセプトは、「自治・自浄能力を育む学校」です。そして、そのために、「全ての教職員で全ての生徒を育てる」という指導方針を立てました。ブロック活動は、この志を実現するための手立てとして行う活動である、と言えます。

### 3 大口中学校は、大口町の生涯学習活動の拠点です。

大口中学校が、「異学年交流型教科センター方式」を取り入れた目的は、「生涯にわたって学び続ける人の育成」です。教育はいわゆる“学校教育”だけで終わるものでなく、生涯にわたる学びがあってこそ、為し得るものであると言えます。本町においても、「大口町生涯学習基本構想」のもと、多様なライフステージにおける学びの場づくりが進められました。そして、大口中学校は、単に中学校を建てるという志向ではなく、大口町民の生涯学習の場として、その拠点となるべく、建設されました。

この理念の具体化のためには、「生涯学習のまちづくり実行委員会」が設立されました。以来10年にわたって、地域住民の参画のもとに、その具現化が図られてきました。その具現化の第一歩となった活動は、「地域ふれあい清掃」です。この活動は、地域住民が生徒と一緒に清掃活動を行う、というものです。この活動は、毎週金曜日に行われ、この10年間、途切れることなく続いています。このことは、“奇跡”と呼んでも過言ではないと思っています。

なぜ、10年間もの間、途切れることなく続いているのでしょうか。それは、活動に参加する地域住民にとって、自らの意思で参加し、生徒との清掃を通しての会話、参加者同士との会話の中で人間関係を形成し、やりがいを見出していったからに他ならないと思います。中には、この活動が「生きがい」とまで、おっしゃられる参加者もいます。

大口中学校には、地域開放室を拠点とした生涯学習棟が整備され、幼児から小学生、一般成人に至るまでの学習機会を提供する場となっています。大口中学校を大口町の生涯学習活動の拠点として多様な世代が集い、互いに交流する機会が生まれています。大口中学校は、この中学校の場に集う人との関係性の中に生徒を置き、「豊かな心とたくましい体を持ち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒を育成する」という大口中学校の教育目標を達成しようとしています。

## 第2章

### 大口中学校の“うわさ話”に答えます。

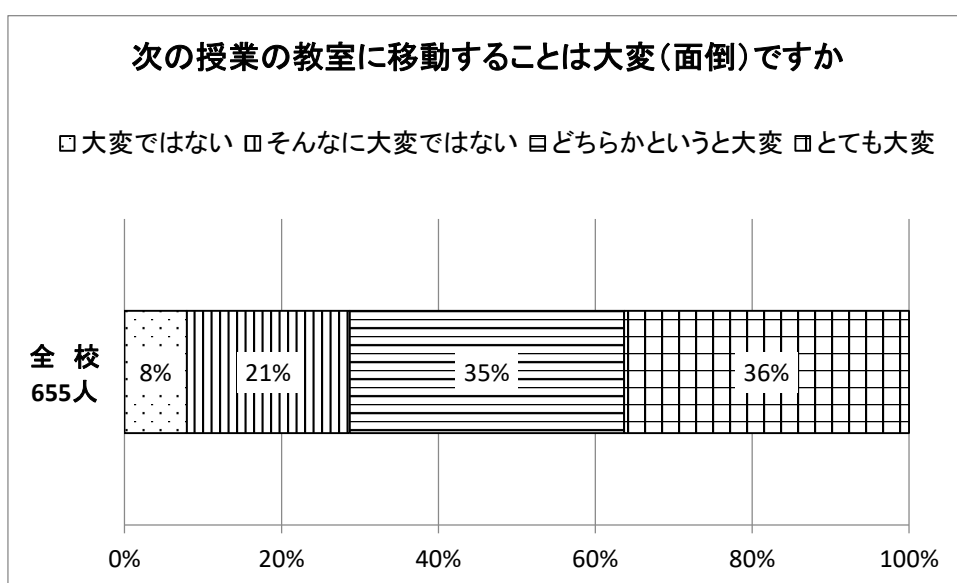
大口中学校は、どのようなねらいをもって、教科センター方式やブロック活動に取り組んでいるのでしょうか。

第2章では“うわさ話”と称する問いに答える形式で、大口中学校の現状について説明していきます。

## I 生活編

### 1 教室移動で子どもが疲れてしまうって話を聞くけど、どうなの？

「疲れる」あるいは、「疲れない」という判断は主観的なものであり、第三者が推測して述べるのは適切ではないと考えます。そこで、全生徒へのアンケート調査を行いました。結果として、「どちらかという大変」「とても大変」と答える生徒はおよそ7割いることが分かりました。



この結果は、想定していた以上に「大変だ」と感じている生徒が多いものでした。教室移動に伴う負担が、得られる効果に見合うものにしていく必要があります。

2 教室移動で授業に遅れてくる子がいるって話だけど。

問いにあるような事実は、ありません。

1 年生の入学当初は、教室の場所が分からず困ったこともあるようです。しかし、場所が分からなくて困るという問題は、しばらくするとなくなっていく、と観察しています。

また、「意図的に授業に遅れる」という生徒はおりません。

3 移動するのに時間がかかるのでトイレにも行けないっていうけど。

授業に遅れないようにするため、トイレを我慢することがあったという話を聞いています。

こうした生徒の、学校生活に適應しようとする意欲は認めるべきものでありますが、トイレに行っていて仕方がなく遅れるのと、意図的に授業開始に遅れることは根本的に違うことを伝えて諭したことがあります。

#### 4 先輩が怖くて、トイレに入れないんだけど。

教科センター方式のもと、全校生徒が教室移動しようとする際に突き当たる課題は、いわゆる「学年の壁」という言葉が表す従来の学校運営の考え方です。従来の学校運営は、「学級王国」という言葉があるように、学級や学年集団の中で「閉じられている」ことが多くありました。つまり、教師は自分の学級や学年がよければよい。異学年との交流はあまりなく、ともすれば規律がとれていない、いわゆる荒れた学年には自分の学年の生徒には近づかせない、という考え方もあったりもしました。使うトイレも学年ごとに指定されているほどでした。

しかしながら、教科センター方式では、教室移動で違う学年と接触があることは避けて通れません。ならば、はじめから「学年の壁」を取り除き、日常生活から、学年間を交流させてしまおう、ひいては、異学年が交流することを前提とする日常生活の中で、共に生きる「共生」の精神をもった生徒を育てよう、そのような発想から異学年交流という理念を抱き、学校経営の特色の一つとして位置づけました。こうした考え方から、大口中学校では、単に「教科センター方式」と呼ぶのではなく、そのシステムを「異学年交流型教科センター方式」と呼んでいるわけです。

異学年交流の教育を進めることによって、標記の問いを感じる生徒がいるならばその子の気持ちに耳を傾け、その子が先輩がいても大丈夫だなと思ってもらえるような働きかけをしていきたいと思います。

## 5 教室移動で一人ぼっちになって寂しがっている子がいるって聞くけど。

中学生の子にとって、「友達と一緒にいる」という感覚は大きな意味を与えるものだとして理解します。教科センター方式の特徴の一つは、生徒が授業ごとに教室を移動するという点です。この悩みは教科センター方式から生じる悩みであるとも言えます。ただ、教科センター方式で無い学校においても、ホームルーム以外で行う5つの教科（理科、音楽、美術、技術・家庭、体育）では、特別教室等への移動を要しますので、必ずしも教科センター方式だからというわけではないと言えます。

下表は、大口中学校が採用する「教科センター方式」の伴う教室移動の行為によって生じる長所と短所をまとめたものです。

表：教科センター方式の長所と短所

長所	短所
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自ら当該教室に移動することで、能動的に学習に向かう意識が芽生える。</li><li>・ 教科の学習に適した環境で学習ができる。</li><li>・ 生活拠点と学習拠点が異なるので、学習時間と休み時間の意識の切り替えができる。</li><li>・ 教室移動により、気分転換ができる。</li><li>・ より幅広い相手との交流が生まれやすい。</li><li>・ 他者との関係距離や居場所選択が、一人一人自由にできる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 一般的な中学校より教室移動が多くあるため、休み時間に余裕がない。</li><li>・ 1時間目の教室移動時間を生み出すために、補充学習のための朝学習の時間が生み出せなくなる。</li><li>・ 同一空間に長く在留しないために、ホームルーム教室に対する帰属意識が生まれにくい。</li><li>・ 学級集団としての居場所を定めにくく、学級内の人間関係を構築しにくい。</li></ul>

長所と短所は表裏一体の関係にありますので、教室移動に伴って、幅広い相手との交流が生まれたり、他者との関係距離や居場所選択が自由にできたりする側面も指摘することができます。

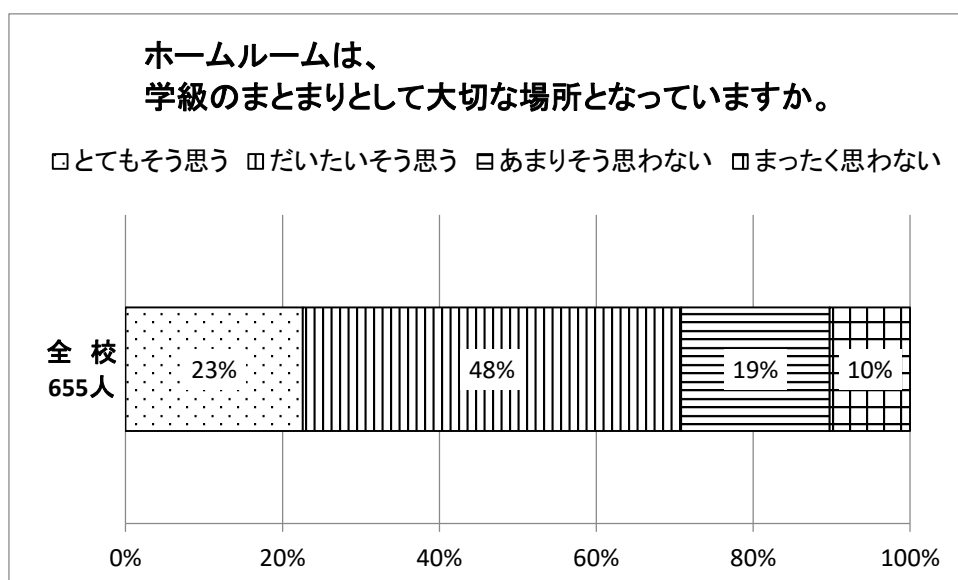


## 6 自分たちの教室がないので、学級としての一体感がわかないんだけど。

「自分たちの教室」とは、ホームルームを示していますが、大口中学校にも、ホームルームはきちんと存在します。生徒は登校するとホームルームに入室し、朝の会から一日の学校生活をスタートします。給食を学級の仲間とホームルームで食べ、夕方には帰りの会をして一日を終えます。そして、道徳の授業や学級活動も、ホームルームで行われます。

ただ、授業は、全教科において教科教室で行われるため、授業時間になると「自分たちの教室」から出ていくこととなります。その一方で、ホームルームの教室が、国語、数学、社会、英語の教科用教室と兼ねているため、「自分たちの教室」に他のクラスの生徒が学習のために出入りすることが生じます。

このような状況から、標記の問いが生まれてくるものと推測しますが、下記のグラフは、全校生徒を対象にしたアンケート結果です。



アンケート結果からは、教科教室と兼用するホームルームではありますが、多くの生徒にとって、大切な場所として認知されていることが分かります。教科センター方式だから、「自分たちの教室がない」と生徒に思わせない学級経営をより推進していくことが求められます。

7 自分の机がないので、居場所がない。それが不登校の多い原因じゃないかな。

「自分の机」＝「居場所」であるという感覚も経験則として理解できます。確かに1時間目の授業から4時間目の授業が行われている間、ホームルームの「自分の机」は、第三者が使用していて、「自分」が使うことはできません。しかしながら、「居場所」が「自分の机」だけであるとしたら、これも不自然なことではないでしょうか。

大口中学校では、様々な「居場所」が仕掛けられています。情報スペースである教科ラウンジでは、多様な情報に触れたり、教科教員室に面しているので授業に関する質問を教員に投げかけたりすることが容易です。また校舎の各所にはテーブルやベンチが設置されており、図書室はすべての休み時間が開館されています。こうした多様な居場所の提供により、より幅広い相手との交流が生まれたり、他者との関係距離を一人ひとりが自由に選択できたりするという見方をしたとき、教科センター方式の利点を明示できるのではないのでしょうか。

一方で、「不登校が多い原因」は、「自分の机がない」こととは分けて考える必要があると考えます。また、不登校生徒が「多い」という指摘ではありますが、根拠をもって述べる必要がありますので、本報告書では回答を控えさせていただきます。

8 教師が教科教員室に分かれているので、教員間の連携が不足しているのでは。

「教科教員室」の存在は、教科センター方式の肝になる部分です。なぜならば、「教科センター方式」とは、教科の指導を担当教員がチームとなって組織的に行っていくことが重要だからです。その中核的場所（センター）として教科教員室があり、ここを起点にして教科経営が行われます。

ですので、大口中学校では生徒が在籍している間は、教員には教科教員室を中心にして執務をするよう申し合わせています。一方で一般的な学校では、教科教員室そのものがないため、職員室で執務が行われます。そのため、大口中学校では、教科の教員間の連携は高まるけれども、それ以外の教員との連携が不足するとないかとの心配が生じるものと思われる。

こうした中、大口中学校では、「全教職員で全生徒を育てる」という経営方針を立てています。従来型の学年経営を中心とする学校運営では、他学年のやり方には干渉しない、という慣習があったものでした。これを打破しようとして「異学年交流型教科センター方式」に取り組んできています。

「教科教員室に分かれている」とこと、「教員間の連携が不足している」ことは、関係ありません。こうした条件の中で、どのようにしたら教員間の連携が円滑になされるかは、学校現場で連綿と模索していくことになると思います。

(本ページ余白)

## Ⅱ 学習編

### 1 大口中学校の学力は低いのか？

このような話がまことしやかに聞こえてくるとき、何を根拠として述べられたものなのか、疑問に思います。なぜなら、学力が高いか低いかを示す指標、つまり他校と比べて学力の順位付けを図る指標など、無いからです。

また、「学力」が高いか低いかを論じる時、その観点は何なのかについて、社会的なコンセンサスは得られていないのが現状であります。したがって、その言葉の使い手によって、その意味内容は異なったものとなっています。

そのような中、学力を測る一定の指標として、現在、全国的に使われているものが、文部科学省が全国すべての小中学校（小学校は6年生、中学校は3年生が調査対象）を対象に毎年行う、「全国学力・学習状況調査」があります。

大口町におけるこの調査における平均正答率の全国結果との比較結果は、次の通りです。参考として、大口町3小学校の平均正答率の結果も掲載します。

<図：教科に関する調査結果「全国平均との比較」（平成30年度）>

大口町	国語A	国語B	算数A 数学A	算数B 数学B	理科
小学校	同等	同等	やや下回る	同等	同等
中学校	同等	同等	同等	やや下回る	同等

尚、上記表をはじめ、「全国学力学習状況調査」についての結果分析、並びに、大口町の学力向上対策については、大口町ホームページに公開してありますので、詳しくは、こちらでご確認ください。

【検索：大口町 全国学力・学習状況調査の結果について】

<http://www.town.oguchi.aichi.jp/4629.htm>

<備考>

全国学力・学習状況調査においても、この結果は児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てるものであり、児童生徒個人の順位付け、学校の序列化を図るものではないことには留意が必要です。（詳しくは、実施要領を参照ください。（文部科学省ホームページで公開））

## 2 教科センター方式のせいで、生徒が落ち着いて学習に取り組めないんじゃないの？

落ち着いて学習に取り組む。

このことは、学習内容の定着に欠かせない、根底にあるものと考えます。

そして、その行為を具体的に示すと、「人の話は最後まで聴く」ことだと考えます。「人の話」とは、先生の話であるし、学級の仲間の話でもあります。特に、「今は〇〇くんが話している、終わるまで待って」と勝手に話すことを許さない。このように、学級におけるルールの徹底が重要です。

同時に、学級の一員であること、大切にされている実感、何でも聞いてもらえるという気持ちを、子どもたちに持たせることが重要です。さらに、教室では間違えてもいいんだ、みんな聴いてくれる、という安心感を築くことが重要です。

大口町教育委員会では、このような基本的な学習習慣を定着させるために、「大口学びスタイル」を策定しました。大口学びスタイルとは、「授業」の視点から、小中学校が一貫して取り組む基本方針を示したものです。小学校1年生から中学校3年生まで、全ての学級、全ての教科の授業において、本方針に則り授業を行おうとしています。平成28年度から始め、今年で3年経ちます。

大口中学校は3つの小学校から集めます。3つの小学校の授業スタイルが揃っていれば、中学校に入学しての授業もスムーズに行われます。

教科センター方式を推進するための手立てとして、「大口学びスタイル」は重要な役割を担っています。

### <参考>

「大口学びスタイル2018」は、大口町ホームページで公開しています。詳しくはこちらでご確認ください。

【検索：大口学びスタイル】

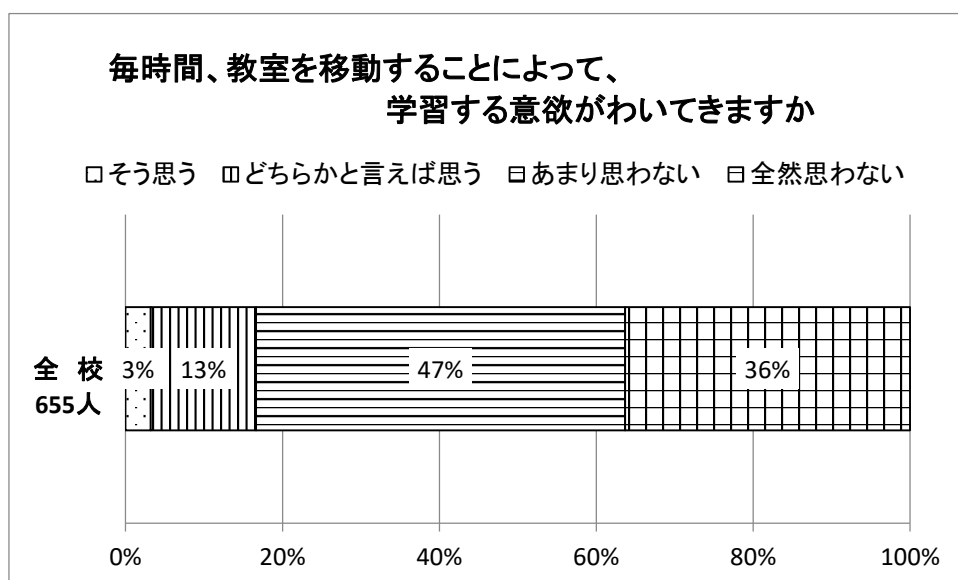
<http://www.town.oguchi.aichi.jp/4905.htm>

### 3 教科センター方式って、生徒が教室移動しているだけで、あんまり意味がないんじゃないの？

教科センター方式による学習への効果として、次の2点が挙げられます。

- ・自ら当該教室に移動することによって、能動的に学習に向かう意識が芽生える。
- ・教科の学習に適した環境で学習できる。

このことについて、全校生徒にアンケートをとってみましたが、残念な結果がありました。アンケート結果によりますと、8割の生徒にとって、教室移動が学習意欲の喚起にはつながっていないのが現状です。

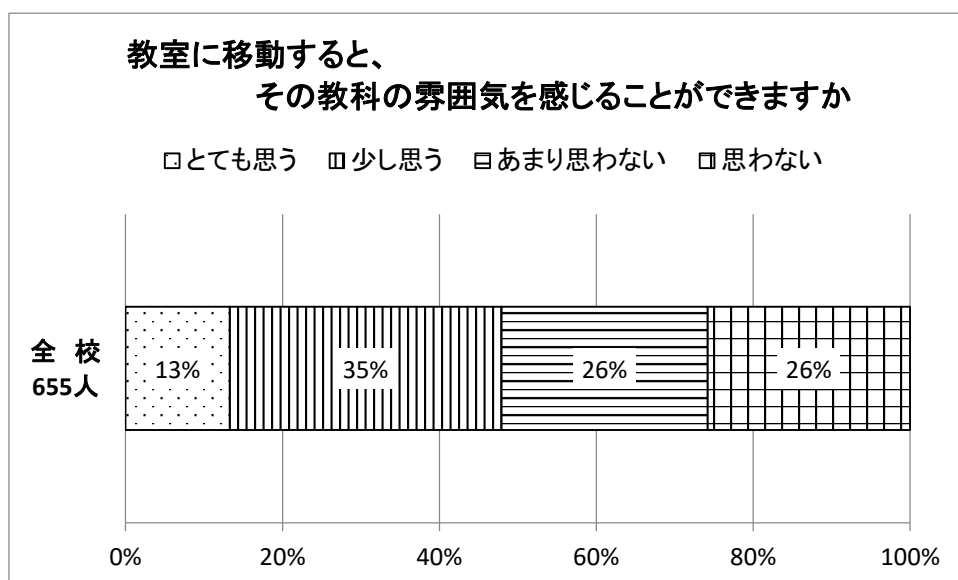


移動による学習への能動的な姿勢がアンケート調査から見られない理由は、各教科フロアの実環境整備、その環境を生かした授業づくりや授業展開にあるのではと考えています。こうした分析については、後述していきます。

#### 4 教科ラウンジって、あんまり活用されていないんじゃない？

教科ラウンジとは、各教科フロアの中心的な場所に配置されているオープンスペースのことです。教科ラウンジには、その教科ならではの掲示物や実物模型などの展示がされており、教室を移動してきた生徒を、その教科の学習に誘う場所と言えます。

生徒は各教科フロアの教室に移動して、教科ラウンジに触れることによって、その教科の雰囲気を感じ取っているのでしょうか。アンケートから現状を見てみます。



このアンケートからは、約半数の生徒が、各フロアの教室に移動することによって、教科固有の雰囲気を感じています。

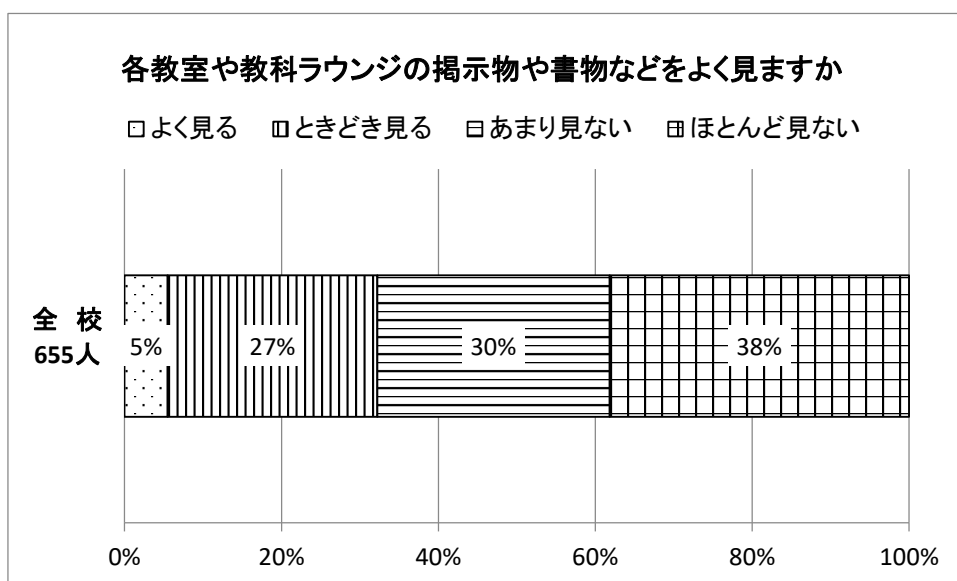


5 教科教員室が近くにあるのは、いつでも質問できるからという話だけど、教室移動の為、質問する時間がないんだけど。

授業と授業の間の放課は 10 分間です。教科センター方式でない一般的な中学校でも放課は 10 分であるため、大口中学校では移動する分だけ、同じ 10 分では時間がないのではないか、と話題になります。

しかしながら、他の中学校でも、9 科目の教科のうち、理科、音楽、美術、技術家庭、体育の 5 教科は同様に移動します。そういう意味では、10 分という放課時間での教室移動は、大口中学校だけに限った話ではないことには議論をする際に留意が必要です。

下記は、「各教室や教科ラウンジの掲示物や書物などをよく見ますか」と問うアンケート結果です。これを見ますと、「ほとんど見ない」とする生徒が 4 割存在するという結果であり、10 分の放課時間に教科ラウンジに滞在する生徒を生み出せていないのが実情です。この結果から、次の教室に移動するため、教員に質問する時間も限られているであろうと推測されます。



## 6 授業中に寝ている子が多いって話を聞くけど。

寝ていても授業が進んでいく。

寝ている生徒がいるとしたら、当該生徒には、自己を見つめてほしいとは思いますが。しかしながら、教師がそのような授業をしていること自体に問題があるものと考えた方が、物事を改善していくための糧となると考えます。

日本の学校は伝統的に授業研究が盛んで、各学校はそれぞれ「現職教育テーマ」という授業研究課題が設定しています。そして、このテーマをもとに、全教職員が共通目標をもって日々の授業改善が図られていきます。

大口中学校の現職教育テーマは、「全員参加の授業づくり」です。本テーマにおける授業の主体は教師ではなく生徒です。生徒一人一人が授業の創り手として、学習課題に向かって協働して参加していく、そんな授業にしていきたいと大口中学校は考えています。

本編では、教科センター方式が、生徒の学習にどのように効果を与えているかとの問題意識の中で論じてきましたが、総じて述べれば、次のようになると考えます。

よき授業がなければ、教科センター方式の効果はない。教科センター方式の良し悪しの決め手は、授業である。

授業改善に、不断の努力が求められます。

### Ⅲ ブロック活動編

#### 1 縦学年の教室配列の為、同学年の友達ができにくいんだけど。

標記の「同学年の友達ができにくい」という声は、同じ学年なのに教室が離れている大口中学校の教室配列から生まれるものです。生徒間から、時には、保護者間から、「同学年お友達と交流が図りにくい」と聞くことがあります。また、教員からも、学年単位の指導ができにくい、という声があがり、この教室配列の問題は、開校以来から現在に至るまで議論が続いています。実際、開校3年目となる平成23年度には、学年並びの教室配列にしたことがあります。

平成30年度の大口中学校の教室配置図は、次ページに掲載する通りです。

「縦学年の教室配列」とは、例えば、1年生・2年生・3年生の「1組」をAブロックとして、3階北館の社会科フロアに3つの学級を横並びに配列していることを指します。3年1組がブロックのリーダー的役割をもって、両隣の2年1組、1年1組を導くというねらいをもった配置です。

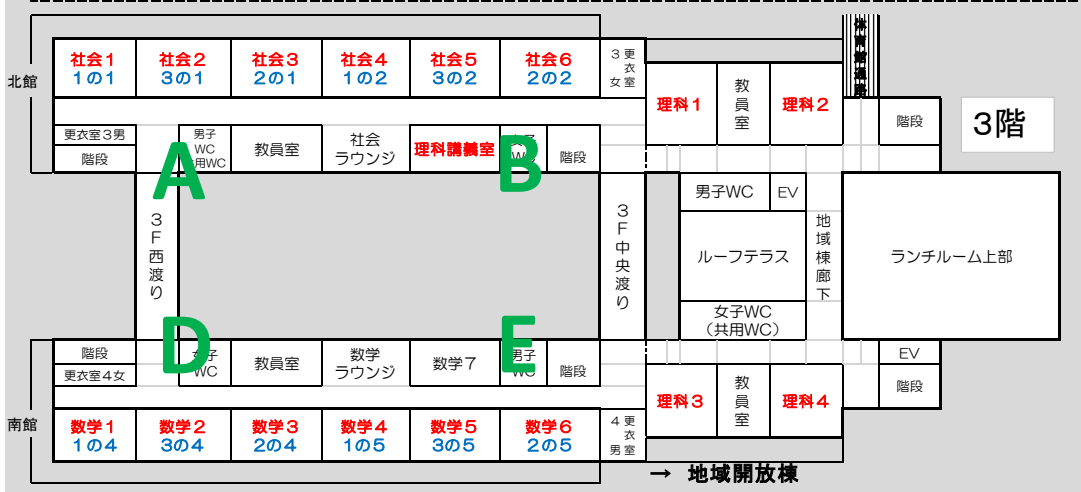
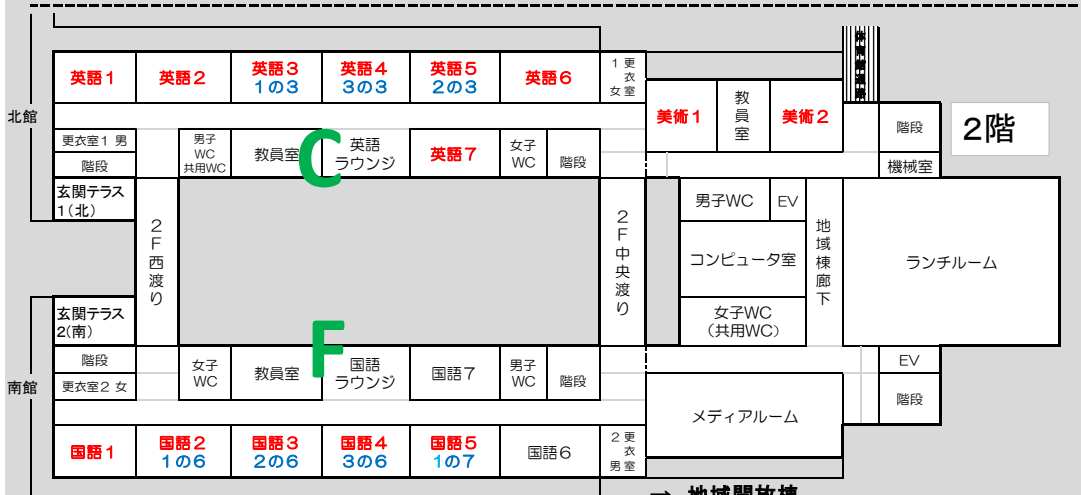
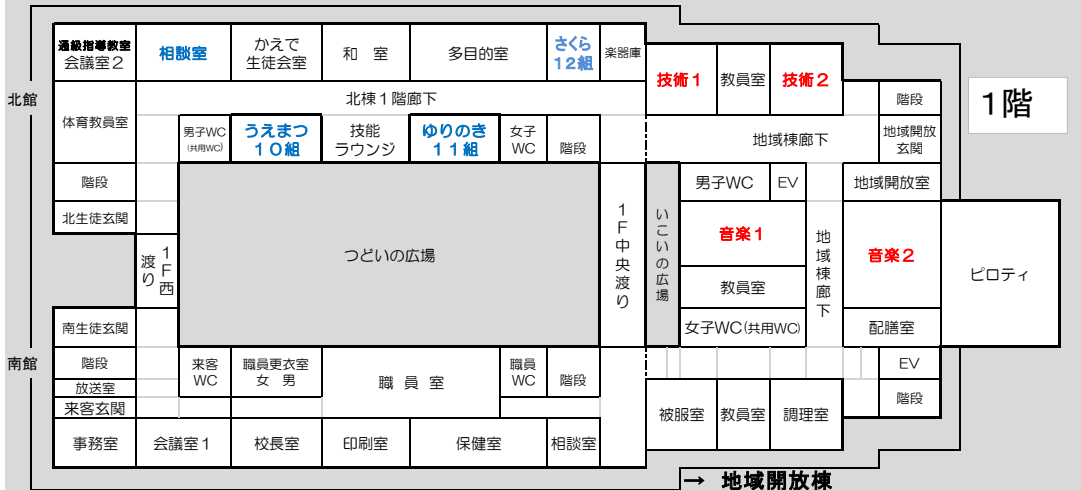
一方、一般的な学校では、例えば3階のフロアは、3年1組から2組・3組・・・と、2階フロアには2年生の全学級が、というように、同じ学年が一並びに配列されています。おそらく保護者にとっても、ご自身の中学生時代もこのような教室配列だったと思います。

しかしながら、大口中学校が、これからの社会を生き抜く必要な資質や能力を育てるために、教科センター方式のもとに学校運営をしていこうとした時、従来の学校運営の“常識”を拭い取り、新たな発想で手段を講じることが求められます。そして、開校時の議論の中で生まれたのが、「異学年交流」という考え方であり、(このことについては、第2章Ⅰ生活編4参照)その手段として「ブロック活動」が生まれ、これを具現化するための手立てとして、縦学年の教室配列(ブロックごとの教室配列)の発想が生まれました。現在の教室配列はこのような考え方のもとにある訳です。

さて、「同学年の友達を作りたい」という思いは、生徒の必然の願いであります。ですので、現在の教室配列であろうと、この思いが叶うよう学校は学年経営に留意すべきです。その上で、現在の教室配列の環境を十分に生かしてブロック活動の推進に取り組み、共に生きる「共生」の精神を持った生徒を育てなければなりません。

# 教室配置図

Aブロック	Bブロック	Cブロック	Dブロック	Eブロック	Fブロック
3年1組 2年1組 1年1組	3年2組 2年2組 1年2組	3年3組 2年3組 1年3組	3年4組 2年4組 1年4組	3年5組 2年5組 1年5組	3年6組 2年6組 1年6組 1年7組



## 2 先輩が怖いんだけど。

中学校になると、「先輩」という言葉が、日常生活の中で使われるようになります。中学校時代に出会った先輩から、いろいろなことを学んだであろうことは、誰もが共有する経験なのではないかと思います。

さて、大人になり私たちが過ごす社会は、全て異学年集団です。人は、中学校を経て進学や就職をしたり、様々なコミュニティに所属したりする中で、多様な人と関わり人間関係を学んでいきます。

大口中学校では、学校の日常生活の中に、異学年交流の場が生まれる仕組みになっています。怖いけれど優しい人もいます。大口中学校の生徒には、こうした環境の中で、多様な他者から学びを得て、自らの力に代えていってほしいと期待しています。

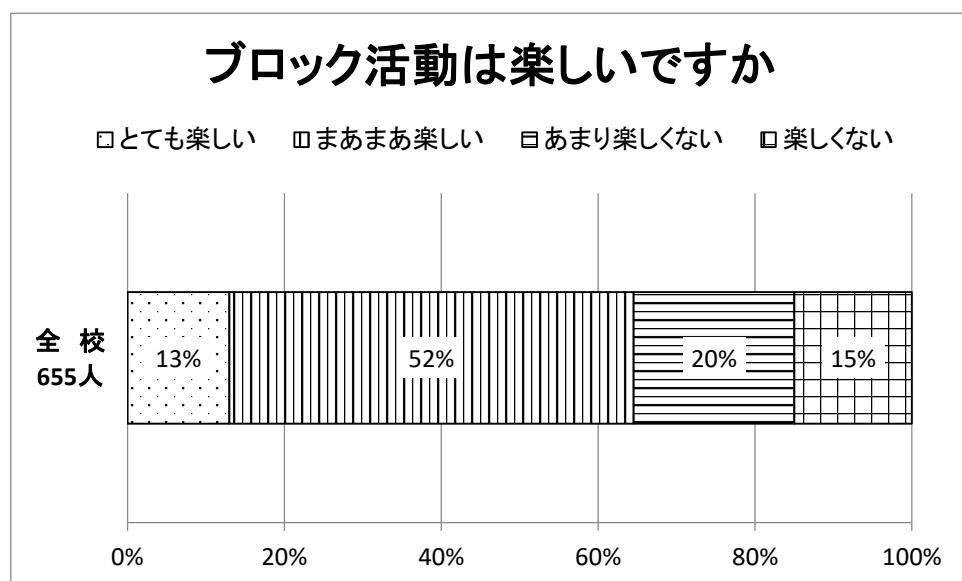
### 3 ブロック活動って、何やっているの？

ブロック活動は、ともすると他校で行っている“縦割り活動”と同じようにとらえられている場合があります。例えば、体育大会での応援合戦で、1年1組と2年1組と3年1組が合同して行うことは、他校でも行われています。

一方、大口中学校のブロック活動は、体育大会のような学校行事の時だけでなく、年間を通して日常的に取り組みられています。例えば、清掃活動や給食活動も、異学年で一つのグループを組んで取り組みます。また、ブロックごとに学校生活をよりよくするためにはどうしたらよいのか、主体的に問題を見出し、課題解決や改善活動に取り組むプロジェクトを行っています。このプロジェクト活動は、毎年の生徒総会で取組の説明と成果の発表があり、1年1年、その活動レベルは上がっています。

こうした諸活動が日常的に成り立つのは、先に触れたブロックごとの教室配置等の手立てにより日常的な人間関係が成立し、3年生が両隣の1年生と2年生を導くという構図が成り立っているからだと思います。

下記のアンケート結果は、6割を超える生徒がブロック活動を楽しいと感じていることを示しています。大口中学校の特色として、ブロック活動が多くの生徒に肯定的にとらえられていることが分かります。



#### 4 ブロック活動の時間のせいで、授業の進度が遅れているんじゃない？

「授業の進度が遅れている」という指摘を受けたことがあります。進度が遅れる原因が、ブロック活動の時間のためかどうかについて、現在の教育環境をもとに述べたいと思います。

まず、授業は年間指導計画（カリキュラム）に則り進められます。1年間の授業時間数も、学習指導要領で定められ、どの学校においてもその基準が達成されるよう教育課程を設定しています。

大口中学校のブロック活動は、年間70時間ある「総合的な学習の時間」の一部を使って行っています。ですので、ブロック活動のために授業の進度が遅れることはありません。

一方、授業進度が問題になる背景には、平成20・21年度（2008・2009年）の学習指導要領の改訂があります。この改定で、教科書のページが増え、教科書が重くなったというニュース報道が社会的に話題になったところは記憶に新しいところであります。具体的には、国語、社会、数学、理科、英語、保健体育の授業時数が実質10%増加しました。教育内容量の増加です。

しかしながら、時間割は従来通りの週29コマに変わりありませんでした。総枠の授業時間数は同じなのに、各教科の授業時間数が増えている。つまり、カリキュラムに、いわゆる“余白”がなくなっている現実がある訳です。

授業は計画通りには進まないこともあります。生徒の理解状況を確認しながら場合によっては反復したり、より興味関心を高めるために計画時間以上に学習活動を増やしたりすることがあります。また、時には教師が生徒に何かについて話すという時間も、以前はあったものでした。

平成32・33年度（2020・2021）には、さらなる学習指導要領の改定が待ち受けています。これは中学校の授業時数には変動がありませんが、小学校では教科「外国語」が新設され、年間の授業時間数が、現行（50時間）から20時間増の70時間になります。小学校にも教育内容量の増加があることがこの改訂の特色です。

このような背景の中、ブロック活動を含め、どのような教育課程を設計し、これをどのような時間割で行っていくのが、子供たちにとってよいのか、議論しなければならない時期に来ていると考えます。

## 5 ブロック宿泊研修って、1泊する意味があるの？日帰りでもいいんじゃない？

平成27年度のブロック宿泊研修が、台風の接近により出発できず、翌日、日帰り行程で実施したことがあります。この時は、急な行程変更にもかかわらず、何とか日帰りでも実施したいと対応に尽力した教職員、そして、生徒の柔軟な対応力のお陰で実現にこぎつけることができました。日帰り日程でもそれなりに充実感も得られた様子から、標記のような声が凶らずもあがってきた経緯があります。

さて、ブロック宿泊研修とは、タイトルの通り1年生・2年生・3年生から成る異学年集団で宿泊して24時間の時間を共有するという行事です。このような取組は他校ではありません。なぜなら、“不可能”だからです。日常的に異学年集団で日常の学校生活を共にする大口中学校だから“できる”ものです。

そして、その大口中学校でも、最初から宿泊研修の実現ができたわけではありません。ブロック活動は開校1年目から始めましたが、その活動内容は一つ一つ創り上げる過程そのものでした。そして、開校して4年が経つ平成24年度、ブロック活動として積み上げてきた成果を発揮する場として、宿泊研修が行われました。

ブロック宿泊研修は、大口中学校の“挑戦”なのです。異学年で宿泊行事ができること自体が、大口中学校の力であり、“伝統”であると捉えています。

大口中学校は10年という歴史の中で、「伝統」を1年1年確実に築いてきました。卒業式では、先輩から後輩へ、後輩から先輩へ、感謝の気持ちを述べる感動的な姿に出会います。このような思いが共有できるのは、大口中学校の生徒一人一人が、「ゴール」のイメージを「共有」しているからだと思います。例えば合唱コンクールではどのような歌声を響かせるとよいのか、協力するとはどのようなことなのかなど、生徒はよく知っています。なぜなら、先輩たちの姿を見てそのイメージを築いているからです。これが「伝統」の力だと思いません。

ブロック活動によって10年という月日のうちに育まれた「伝統」の力は、きっと、これからの中生を支える力になるものと期待しています。



## 6 ブロック活動に時間をかけているけど、意味あるの？

ブロック活動は、「異学年集団で行う自治的活動」として開校当時から取り組んできました。その中で、学校生活の多様な場面において、異学年交流を取り入れ、活動の幅を広げてきました。

そのような中で生まれてきた課題が、「ブロック活動を通して、生徒にどのような力を身に付けさせようとしているのか」というものです。そして、このような課題意識の中、大口中学校が平成25年度から設定したものが、「A・T・T」という汎用的能力の設定です。（詳しくは、資料編 p.55参照）

このATTとは、経済産業省によって「社会人基礎力」として提唱されたものを、大口中学校独自に応用して設定しました。ATTの、

A（アクション）は、「前に踏み出す力」

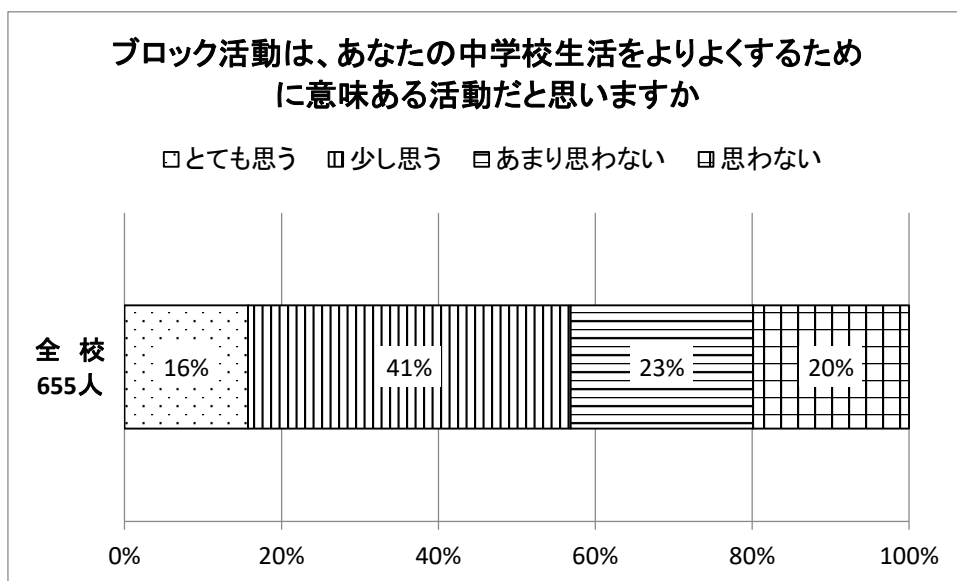
T（シンキング）は、「考え抜く力」

T（チームワーク）は、「チームで働く力」

の、3つの能力を指しており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされています。この3つの能力を、ブロック活動を通して身に付けていくことが、大口中学校生徒の目標の一つとされています。

さて、このように文面にすると平坦なものに感じられるところがありますが、その意味内容は、とても難しく、とても大切なものです。

大口中学校では、一人一人の生徒が、自分の人生に生じる様々な課題に対して主体者（自分の意思をもって）として行動を選択し、あきらめることなく希望をもって考え抜き、他者と力を合わせることができる力を育むために、ブロック活動を行っています。



(このページ余白)

## 第3章

### 大口中学校の

### 10年間の成果と課題を説明します

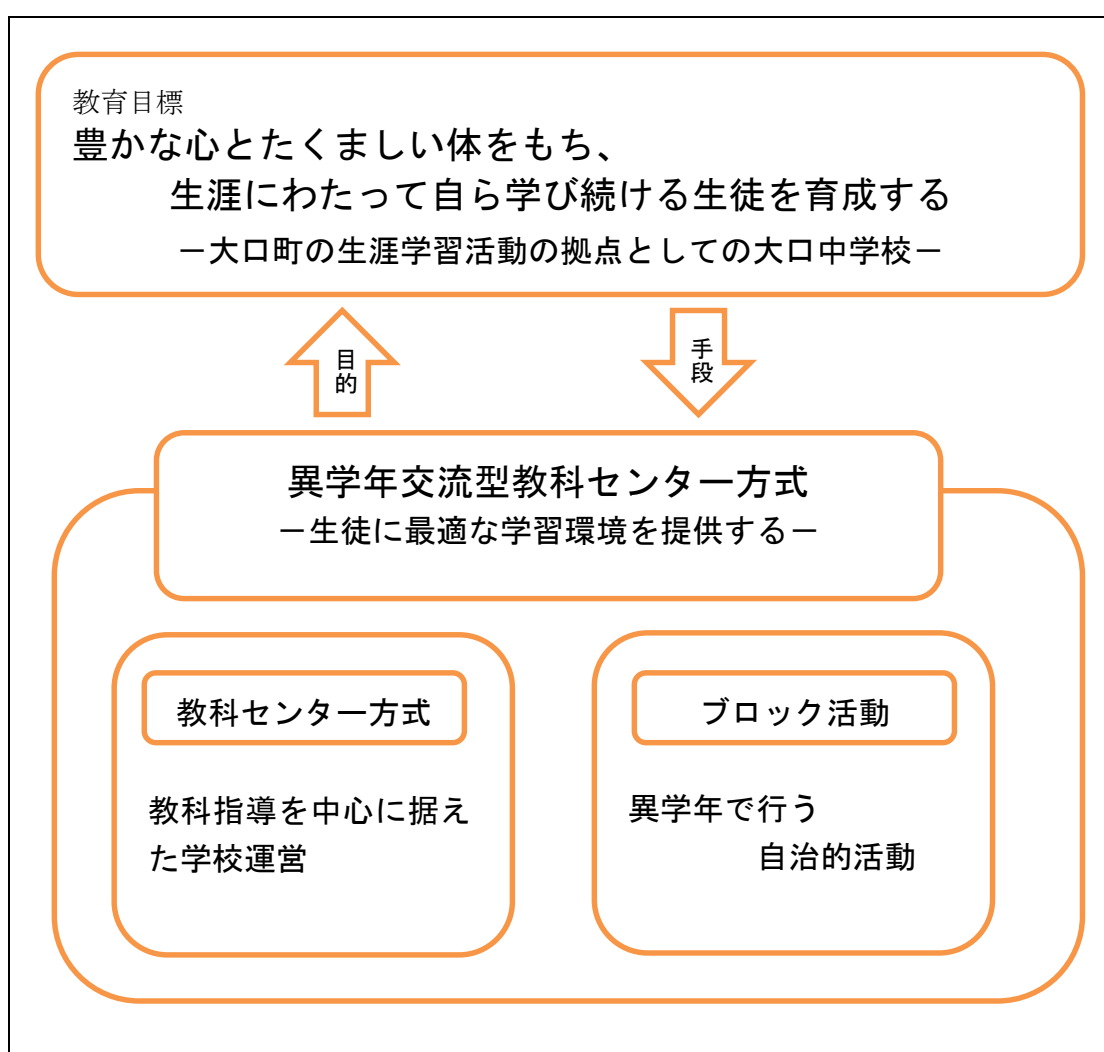
第3章では、「大口中学校が目指してきたこと」を整理し、教科センター方式とブロック活動について、その「成果」と「課題」を明らかにします。

## 1 大口中学校が目指してきたこと

第1章で、大口中学校は次の3つの特色を持つ学校であることを述べました。

- I 大口中学校は、教科センター方式の学校です。
- II 大口中学校は、ブロック活動が盛んな学校です。
- III 大口中学校は、大口町の生涯学習活動の拠点です。

このことを踏まえ、大口中学校がこの10年間で目指してきたことを図で表すと、次のようになります。



## 2 「教科センター方式」の成果と課題は何か

第2章Ⅰ・Ⅱでは、教科センター方式の現状について、Q&A方式で説明してきました。本節では、教科センター方式の〈成果〉と〈課題〉を整理します。

### 〈成果〉

- ① 生徒は、教科ごとの専用教室がまとまって配置してあるフロアに移動する。このことは10年間のうちに習慣化され、日常生活の中に定着している。
- ② 国語フロアに来れば国語の先生、数学フロアに来れば数学の先生に会える、質問できる、という意識が生徒の日常生活の中にある。大口中学校の生徒にとって「教科」の先生は身近にある。
- ③ 各教員がそれぞれの担当教科においてチーム意識をもっている。そして、各教科の指導に対する責任を共有している。
- ④ 教科の教員がチームとなり情報連携が図られ、教員個々における指導内容や指導方法の格差が出にくい状況になっている。

### 〈課題〉

- ① 教室移動をすることが、イコール、生徒の学習意欲を喚起させることにつながっていない。教室移動した先に、どのような授業と出会えるかが、教科センター方式の成否のカギを握る。いまだ、多くの授業で、従来型の知識教授型の一斉授業形式にとどまっている現状がある。
- ② 教科教室・教科ラウンジの整備について、生徒が「その教科の学習に適した教室」と実感するまでの環境整備がなされていない。国語や数学の学習に適した教室とは何か、研究する必要がある。
- ③ 教員が教科ラウンジの環境整備に費やす時間が、日常業務の中に生み出せないという、教員の多忙化の現状がある。
- ④ 教科ラウンジを、ブロック活動の集会場所として併用してきた経緯がある。その結果、教科を学びに移動してきた生徒の学習意欲を喚起したり支援したりする教材教具や掲示物の展示が、中途半端なものになってしまう傾向がある。
- ⑤ 教科センター方式と学力向上との相関が評価できてない。学力をどのように定義づけ、それをどのように測定するのか、研究する必要がある。

### 3 「ブロック活動」の成果と課題は何か

第2章Ⅲでは、ブロック活動の現状について、Q&A方式で説明してきました。本節では、ブロック活動の〈成果〉と〈課題〉を整理します。

#### 〈成果〉

- ① ブロック活動によって、異学年による活動が日常的に生まれている。その結果、他校と比べて多くの生徒に、リーダーシップを学ぶ機会が与えられている。
- ② ブロック活動によって、下級生は上級生の姿に学ぶ機会が日常的に生まれている。その結果、下級生の時に学んだことが上級生になって活かされ、年々、ブロック活動の充実が図られてきた。
- ③ 10年間のブロック活動の中で、生徒間の中に、異学年交流に対する安心感が生まれた。このことは、実社会に出てから役立つ経験値となるだろう。
- ④ ブロック活動で身に付けさせたい力（ATT）を明示することができた。ブロック活動で身に付けた、対立を解決する力や感情をコントロールする力、見通しをもって行動する力、多くの人たちと共に問題解決をする力は、実社会で通用する力の尺度となるだろう。
- ⑤ ブロック活動は、まさに、生徒に身に付けさせたい「自治・自浄能力」の醸成の場になっている。（詳しくは、資料編 p.57 参照）
- ⑥ ブロック活動によって、いわゆる“学級・学年の壁”を乗り越え、大口中学校の「全ての教職員で全ての生徒を育てる」という指導方針が、全教職員で共有するものになった。

#### 〈課題〉

- ① 教科の学習内容が増加する中、ブロック活動のための時間確保が難しい現状がある。
- ② ブロック活動が進めば教科の学習がしわ寄せを受ける。一方、教科の学習を進めればブロック活動がしわ寄せを受けるという二項対立的な関係になっている。ブロック活動が、国語や数学で学んだことも相まって適切に生かすような場にならないか。
- ③ 大口中学校の教員の業務は、他の学校と比べて多い。なぜなら、大口中学校は、教科の指導、学年・学級の指導に加え、ブロック活動の指導が加わるからである。この3つの指導の有機的な連携・統合を図ることができないか。
- ④ ブロック活動として10年間築いてきた活動の中にも、目的があいまいになっている活動がないか見直し、精選を図る必要がある。

## 第4章

### 大口中学校の今後の10年の展望を

### 明らかにします

第4章は、本検証報告書の最終章となります。

ここでは、大口中学校の今後の10年間の展望を明らかにするために、5つの指針と10個の具体目標を述べていきます。

## 1 大口中学校の「最上位の目的」は何か

今後の10年を構想するにあたり、大切なのは、固定観念にとらわれず、上位の「目的」を見据えながら、最適な「手段」を見つけ出すことです。

そうした中、まず考えなければならないことは、「大口中学校の最上位の目的は何か」、という問題であります。

大口中学校の教育目標は、「豊かな心とたくましい体をもち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒を育成する」です。この教育目標は、知・徳・体の観点から、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい力として定めています。

ここで、学校は何のためにあるのか、学校の社会的使命とは何か、考えてみます。

学校は、子どもたちが「社会の中でよりよく生きていけるようにする」ためにあるのではないのでしょうか。これからの時代、社会の変化はますます激しく、答えが一つに定まらない「問い」の中、自ら「答え」を創りだし、そこに希望を見出し、他者と力を合わせて、課題解決を図っていくことが求められます。そのような中、大口中学校の教育目標が掲げる3つの方針、

- ① 豊かな心を育てる
- ② たくましい体を育てる
- ③ 生涯にわたって自ら学び続ける力を育てる

は、大口中学校の「最上位の目的」として、定めることができると考えます。



## 2 「最適な手段」は何か

前節では、大口中学校の「最上位の目的」を再確認しました。今後の10年を構想するにあたり、大切なのは、固定観念にとらわれず、上位の「目的」を見据えながら、最適な「手段」を見つけ出すことです。

そのための最適な手段とは、どのようなものでしょうか。

教育目標にある3つの方針を統合的に取り組む「手段」は、やはり、大口中学校がこの10年間築き上げてきた、「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」の創造に他ならないのではないのでしょうか。

- ①豊かな心
- ②たくましい体
- ③生涯にわたって自ら学び続ける力

は、大口町民の総力を挙げて育てていくものであり、育てることができるものと考えます。このための、さらなる叡智、工夫・創造が求められます。

そして、「教科センター方式」と「ブロック活動」は、「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を具現化するための、「手段」であります。「手段が目的化」し、消化してこなす対象になっていないか、固定観念にとらわれず、本来の「目的」を再確認して、最適な「手段」を再構築する。そうしたプロセスで改善を図っていくことが大切です。

### 3 今後の10年の展望を明らかにする

- ① 教育目標「豊かな心とたくましい体を持ち、生涯にわたって自ら学び続ける生徒を育成する」ことを大口中学校の最上位の目的とし、「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を創造する。

今後の10年間に迎えるにあたって、2つの具体目標を掲げます。

#### (その1)

平日の授業時間に、地域の大人が、大口中学校の教室を使って、文化サークル活動等を行うようになる。

地域の文化サークルの皆さんは、現在、中央公民館等の会議室を使って活動されています。この活動を、大口中学校の施設を使っておこなった場合、子どもたちは地域の大人が学んでいる姿を目の当たりにできます。子どもたちの歌声と、地域の大人の歌声が響きあう、そんな大口中学校が生まれます。そのような中で、生徒と大人との対話・交流も自然発生的に生まれるのではないのでしょうか。

#### (その2)

平日の夕刻以降の時間、「大中アフタースクール」が開かれ、地域の大人が参画して、子どもたちを対象とした様々な講座が行われるようになる。

「大中アフタースクール」とは、教育課程外の時間において、地域の大人が講師となって、部活動も含めた様々な講座を開設するという構想です。講座は、教科書だけでは学べないことを体験を通じて学ぶことができます。そこには町民も、学習者として参加できるようにします。生徒は多様な大人と共に学ぶことができます。子どもたちが帰宅した後も、そのまま大人たちのカルチャースクールとして夜9時くらいまで学校の施設を利用してもらうことができる。教員の働き方改革にも寄与する仕組みになります。

② 「教科センター方式」は、「生徒に最適な学習環境を提供するため、『授業』を中核に据えた学校運営方式」と定義する。「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を具現化するための手段であり、これを通して教育目標を達成することを目的とする。

今後の10年間を迎えるにあたって、2つの具体目標を掲げます。

(その1)

教師は、授業で勝負！ 授業を通して、子どもたちを育てます。

教科センター方式の大口中学校において、教員のミッションは、「授業を通して子供たちに生きる力を身に付けさせること」にあると考えます。

この努力は、学校現場の主体性の中にこそ、発揮されるものです。教科センター方式の優位性を生かし、主体的で対話的な深い学びの具現化に向けて、その努力を全面的に支援します。

(その2)

教科センター方式の優位性を高めます。

教科センター方式の優位性とは、「生徒に最適な学習環境を提供する」ことにあります。生徒がその教科の学習のために移動する先にある環境が、子どもたちの学習意欲を喚起し、学びを支えるものになるよう、教科専用の教室、教科ラウンジの環境づくりに努めます。

③ 「ブロック活動」は、「自治・自浄能力を学ぶ場を提供するために行う、異学年で行う自治的活動」と定義する。「大口町の生涯学習活動の拠点としての大口中学校」を具現化するための手段であり、これを通して教育目標を達成することを目的とする。

今後の10年間を迎えるにあたって、2つの具体目標を掲げます。

(その1)

自治・自浄能力の育成を、大口中学校の指導方針の基盤とします。

ブロック活動は自治・自浄能力を高める場であるけれども、その力の育成は教育活動全体において行われなければなりません。普通の教師の生徒への言葉掛け一つにおいても、生徒の「主体」を育てるためにどのようにしていけばよいのか、教員間の共通理解が必要です。同時に、現場教員の主体的思考が必要です。自治・自浄能力の育成が、大口中学校の指導方針の基盤になるよう、学校経営を支援していきます。

(その2)

教科の学習や実社会における課題と、有機的な連携を図ったブロック活動を創造します。

ブロック活動を行う異学年集団を、「学びの集団」として位置付けることを目指します。上級生と下級生が共に教科の学習をしたり、総合的な学習の時間において共通テーマを設定して共同研究をしたりします。

(例1) 3年生国語科におけるスピーチ学習を、下級生に向けて発表する。上級生は下級生に伝えるという相手意識を持つことができる。下級生は上級生のスピーチから学び取ることができる。

(例2) 総合的な学習の時間を使って、異学年集団によるプロジェクト学習を行う。テーマを設定し、協働して問題解決に取り組む。企業とコラボし、実社会において課題解決が試みられているビジネス上の課題に異学年集団で取り組む。

④ 教育活動の見直し・改善は連綿と継続する。その視点は、学校の上位目的から外れていないかの観点で進め、“当たり前”とされてきたことについても、「目的」の本質を見極め、適切な「手段」を考え抜く必要がある。

今後の10年間に迎えるにあたって、2つの具体目標を掲げます。

(その1)

質の高い教育活動を行うため、業務内容の精選を図ります。

この10年間で教育活動の絶対量が積み重なり、教員の多忙化が進行しています。教育活動の質を高めるためには、今おこなっている業務の棚卸しをすることが必要です。

目的と手段が一致しないものや、手段が目的化しているものは、廃止・見直しをする。その上で、本来の「目的」を再確認して、最適な「手段」を再構築する。そうしたプロセスで改善を図っていきます。

(その2)

学校の“当たり前”を見直します。

例えば、定期テストを実施する目的は何でしょうか。「学力の定着を図る」ためのものでなくてはなりません。しかし、現実には端的に言えば、「通知表をつけるため」のものになっていないでしょうか。定期テストの点数で生徒を序列化し、「5～1」の評定をつける。そうした仕事を進めていくうえで、定期テストは都合の良い仕組みになっています。ここにも、「目的と手段」のねじれがみられます。教師は授業をこなし、生徒はカリキュラムを履修したので進級する。こうした考え方が根底にある限り、「全員に学力を身に付けさせる」ということは、掛け声倒れになるのは明白です。このタブーに蓋をしていて学力保障の議論は進みません。ある中学校では、定期テストを廃止し、単元テストを行っています。単元テストとは、数学なら「比例と反比例」の単元が終わればテスト、社会科なら「中世の日本と世界」の単元が終わればテストと言った具合に、学習のまとまりごとに小テストを実施してします。そして、単元テストは、再チャレンジすることができます。そうして、理解できていない部分を一つずつ分かるように勉強を重ねて、着実に学力を高めていくようになります。

この例のように、学校教育の中には、“当たり前”として行っている事柄は多々あるように思います。固定観念でこれを当たり前とせず、「目的」の本質を見極め、適切な「手段」を考え抜く必要があります。

⑤ 地域社会に開かれた学校を目指す。また、地域と協働して教育課題を解決できる体制づくりを進める。

今後の10年間に迎えるにあたって、2つの具体目標を掲げます。

(その1)

「コミュニティ・スクール」の研究を進めます。

コミュニティ・スクールとは、2004年に制度化された新しい学校教育の仕組みで、文部科学省の説明を借りれば、「学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる『地域とともにある学校へ』への転換を図るための有効な仕組み」です。具体的には、学校・地域・保護者の代表から成る「学校運営協議会」を設置し、そこで定期的に会合をもち、校長の経営方針を承認したり、学校運営の方針に意見を出したりします。この「学校運営協議会」が設置された学校を「コミュニティ・スクール」と言い、2018年4月現在、全国の小中高特のうち、5432校が指定されています。

しかしながら、現状のコミュニティ・スクールには課題があります。過去の失敗事例では、保護者や地域住民が「消費者感覚」で学校に外野から評論家的な意見を言う第三者機関と化してしまったという事例です。学校・保護者・地域住民が当事者意識を持ち、責任とリスクを負ってくれるような仕組みを構築していかなければならないと考えます。

幸い、大口町には、地域社会の諸団体から構成される「生涯学習のまちづくり実行委員会」が開校時に設立され、10年間の活動事例を蓄積してきました。この強みを生かして、大口町版のコミュニティ・スクールを築いていきます。

(その2)

地域社会の諸団体と連携します。

大口町には、子どもの育成を目的とした総合型地域スポーツクラブを始めとする各種NPOや、地域貢献に係る各種諸団体が多数あります。教育は、学校教育だけでなく、あらゆる世代、あらゆるステージにおいて総合的・横断的な連携を持ってこそ、効果を発揮するものと考えます。さまざまな教育課題に対し、その解決を地域社会と共に図る体制づくりを進めます。

## (資料編)

- ◇ 検証報告書作成までの経緯
- ◇ 生徒・教職員アンケート結果
- ◇ ブロック活動で「身に付けたい力」(ブロック活動の振り返り用紙)
- ◇ ブロック長会主催「ブロックの日」プレゼンテーション原稿

## 1 検証報告書作成までの経緯

### ①教育委員会事務局として協議

・検討会議 計9回

### ②有識者から知見を得る

2017年

- 7月 4日 鳴門教育大学 前田洋一氏（教科センター方式有識者）訪問
- 11月15日 まち楽房有限会社 加藤武司氏（コミュニケーションデザイナー）訪問
- 11月17日 黒川設計事務所 校舎建築コンセプト説明（和歌山県有田町議会視察時）
- 11月28日 元東洋大学教授 長澤悟氏講演会（大口中学校教員研修会）  
演題「教科センター方式のもつ可能性」

### ③地域社会との関わり

- 12月17日 大口町地域協働フォーラムにて事例発表  
発表題名「中学生のがんばりを伝えたい」  
※大口中学校卒業生（高校2年生）と共同発表  
「大口中学校で過ごし、今に生きていること」

### ④議会答弁

2018年

- 6月 6日 「大口中学校の教科センター方式の中身について」
- 9月 6日 「大口中の学力の現状と学力向上対策について」

### ⑤教育委員を交えて

2018年

- 2月21日 総合教育会議 教育現場の現状について意見交換
- 6月26日 研修視察 福井市至民中学校
- 6月27日 研修視察 同志社中学校
- 7月31日 研修視察における意見交流会  
（教育委員と参加中学校教員との意見交流）



⑥ 4小中学校長を交えて

2018年

ア 6月20日 2020年度授業日に関する検討会議

(※4小中学校長を交えて、授業時間が増える事への対応について協議)

イ 9月18日 同 第2回会議

(※4小中学校長を交えて、多忙化に関する抜本的解消策について協議)

ウ 10月30日 同 第3回会議

(※31年度の年間行事計画の作成段階における、多忙化解消の方策について協議)

エ 1月7日 同 第4回会議

(※授業時間が増えることと、多忙化解消に関する対策として、週日課の在り方について協議)

⑦ 卒業生・在校生の声

ア 2017年

12月17日 大口町地域協働フォーラムにて事例発表

(③再掲) 発表題名「中学生のがんばりを伝えたい」

※教育委員会と大口中学校卒業生(高校2年生)との共同発表

卒業生の発表項目「大口中学校で過ごし、今に生きていること」

イ 2018年

10月26日 サポートルームさくら 学生講師ヒヤリング

ウ 11月「教科センター方式・ブロック活動に関するアンケート」の実施

⑧ 学校現場を交えて

ア 2017年7月31日

研修視察における意見交流会(再掲)

(教育委員と参加中学校教員との意見交流)

イ 2018年11月

「教科センター方式・ブロック活動に関するアンケート」の実施 (再掲)

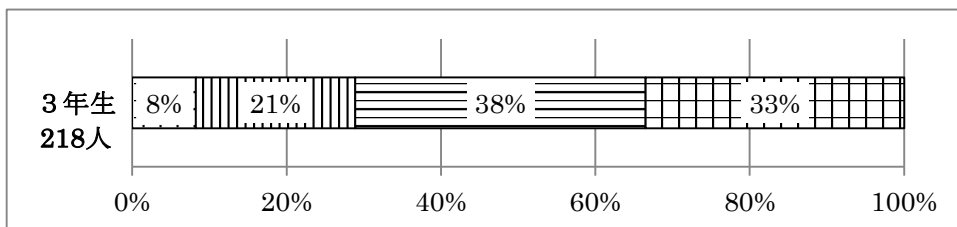
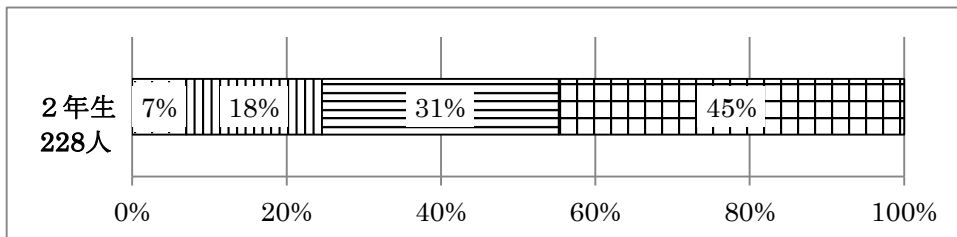
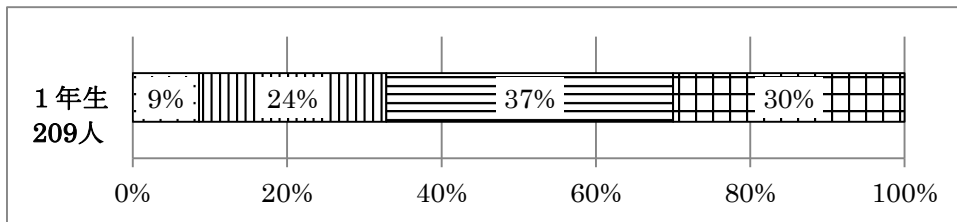
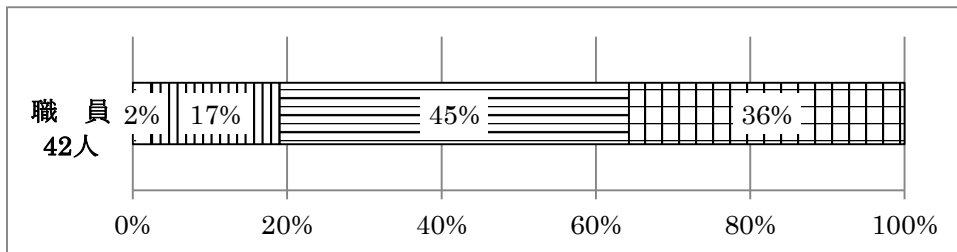
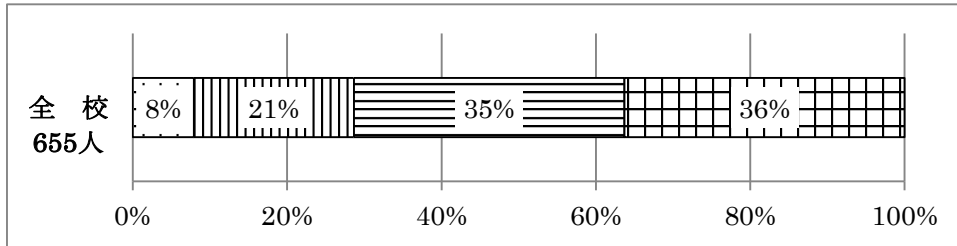
## 2 生徒・教職員対象のアンケート結果

平成 30 年 11 月、大口中学校全校生徒、および、職員を対象に、7 つの項目に対してアンケート調査を行いました。その結果について、次ページから掲載します。

尚、アンケート対象者として、「職員」とあるアンケート結果は、教職員の手応えとして、生徒がどのように感じているだろうかを推察し、答えたものです。

①次の授業の教室に移動することは大変（面倒）ですか。

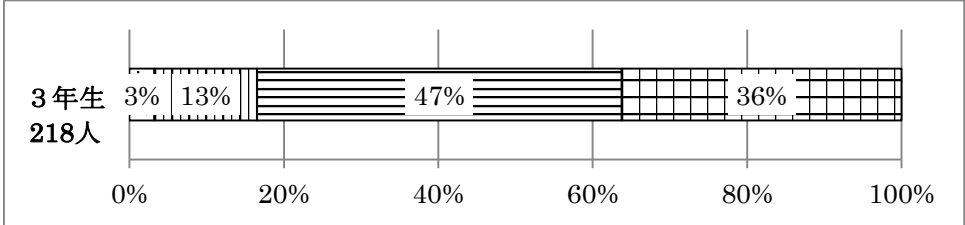
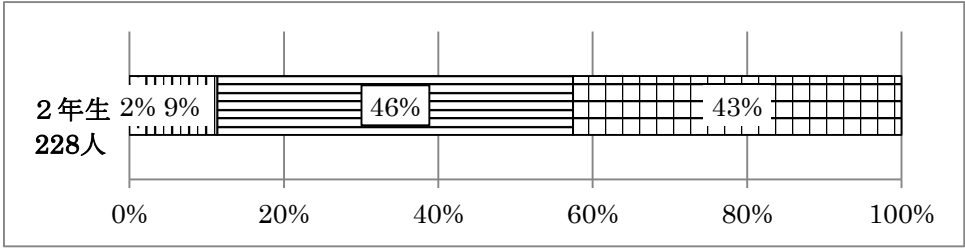
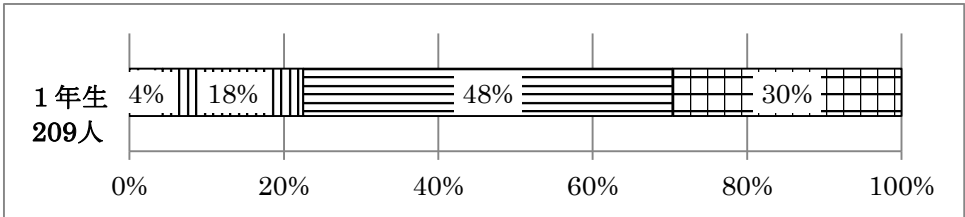
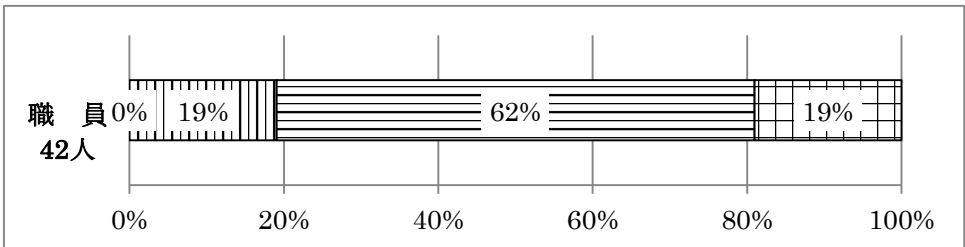
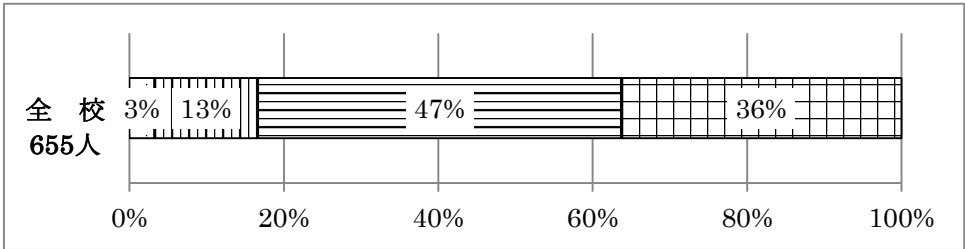
大変ではない  そんなに大変でない  どちらかという大変  とても大変 



- ・ 7割程度の生徒が、教室移動は大変だと感じている。
- ・ 感じ方の学年による差は無い。

②毎時間、教室を移動することによって、学習する意欲がわいてきますか。

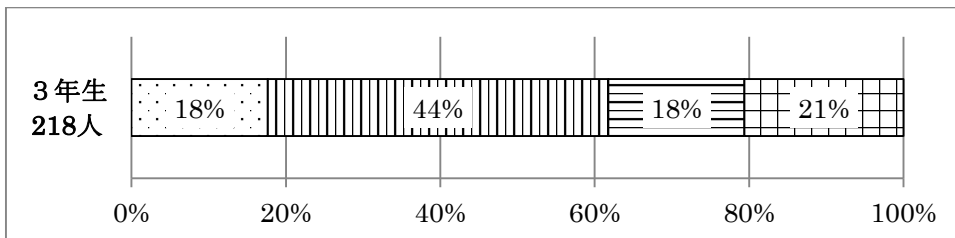
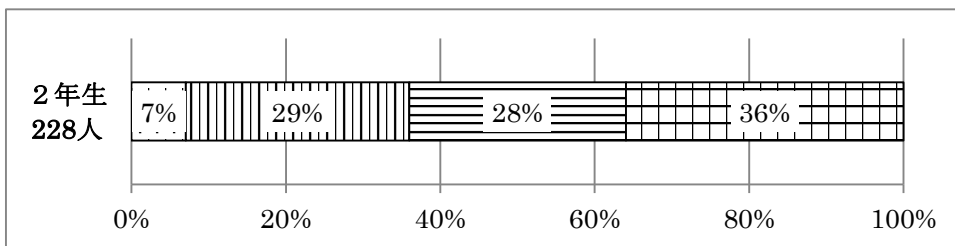
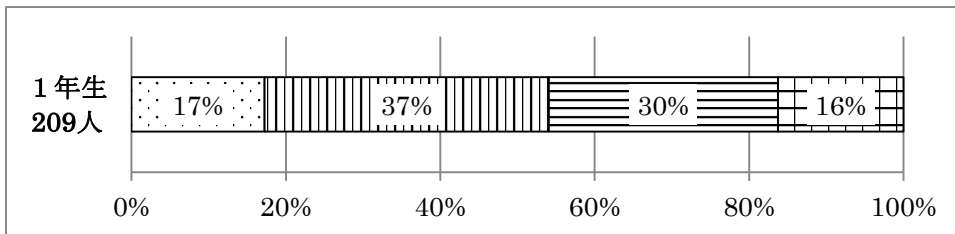
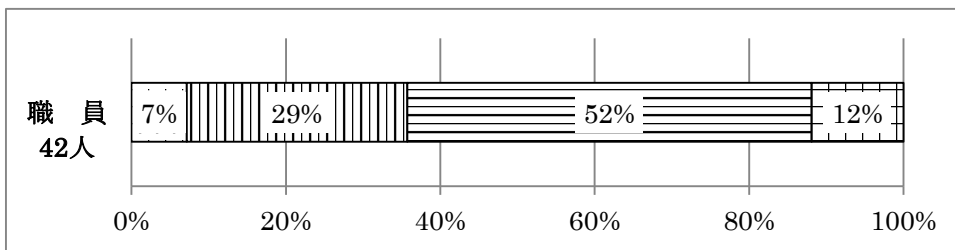
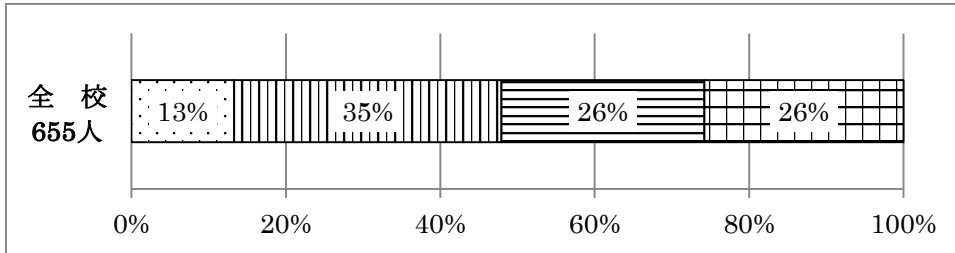
そう思う 
 どちらかといえばそう思 
 あまり思わない 
 全然思わない 



・ 8割程度の生徒にとって、教室移動が学習意欲の喚起につながっていない。

③教室に移動すると、その教科の雰囲気を感じることができますか。

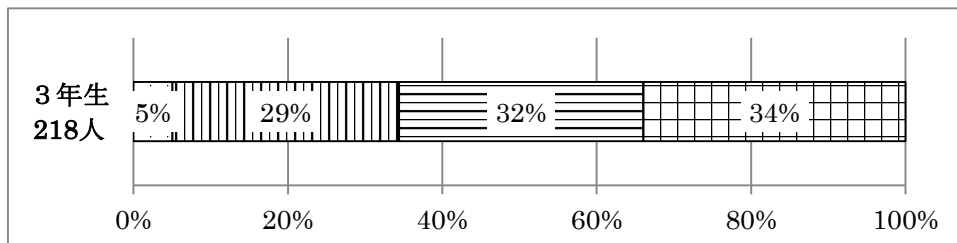
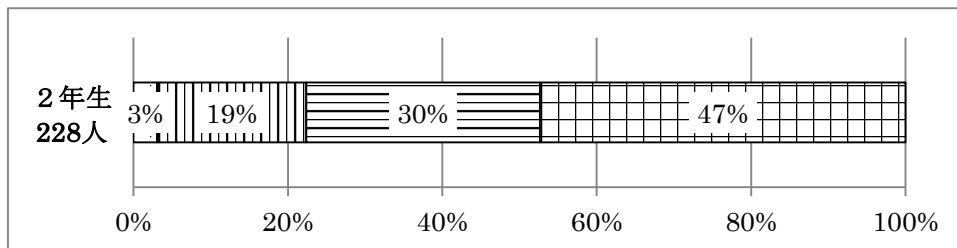
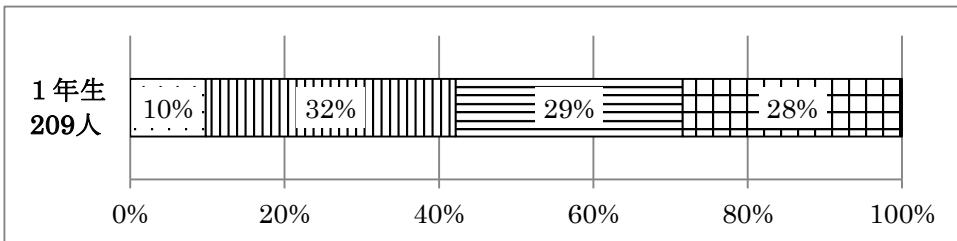
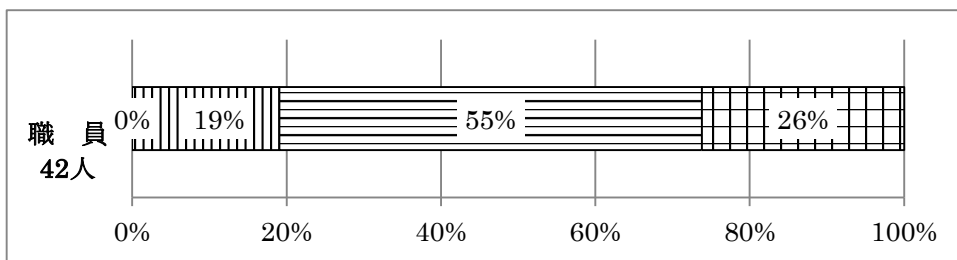
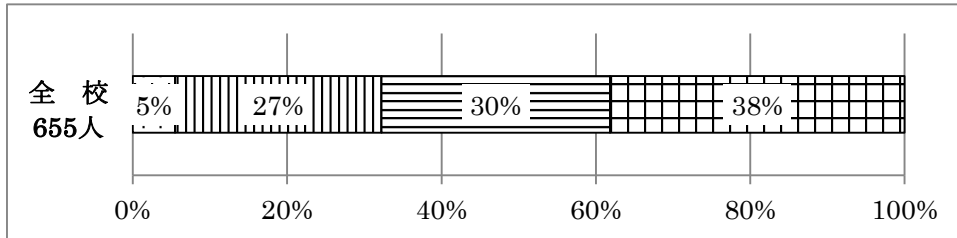
そう思う 
 どちらかといえばそう思う 
 あまり思わない 
 全然思わない 



- ・それぞれの教科特有の環境にあることは感じている。
- ・職員の回答より生徒の肯定的な回答が多い。

④各教科や教科ラウンジの掲示物や書物などをよく見ますか。

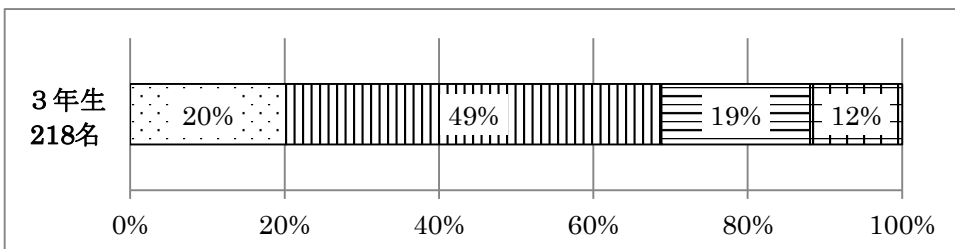
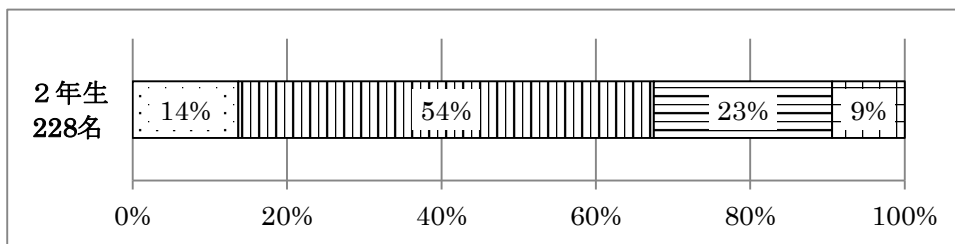
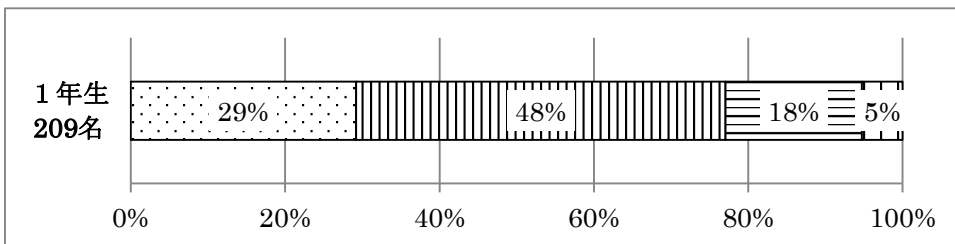
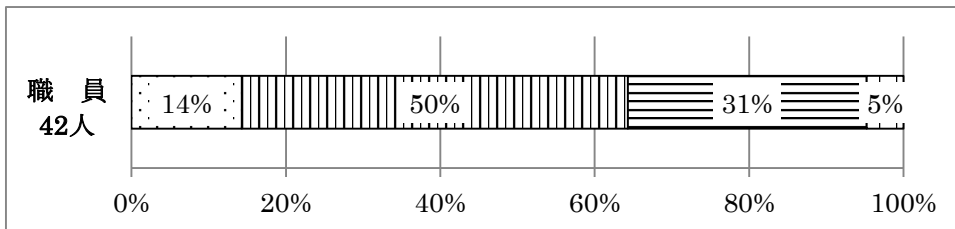
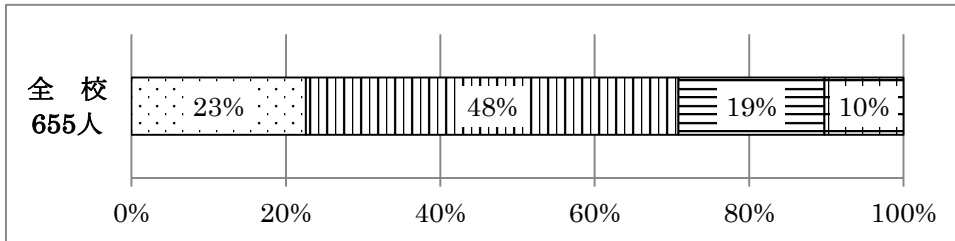
よく見る □      ときどき見る ▨      あまり見ない ▩      ほとんど見ない ▪



- ・「ほとんど見ない」生徒が4割いる。
- ・1年生では4割の生徒が関心をもって見ている。

⑤ホームルームは、学級のまとまりとして大切な場所となっていますか。

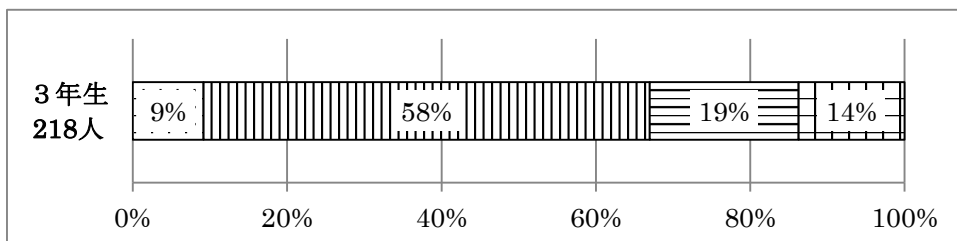
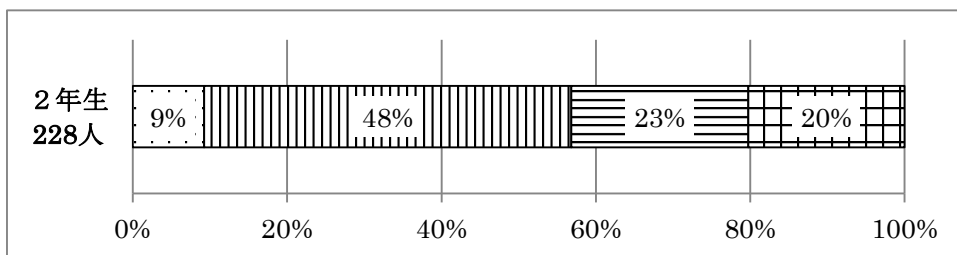
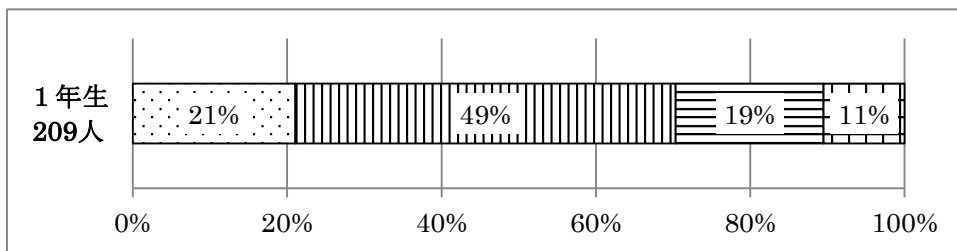
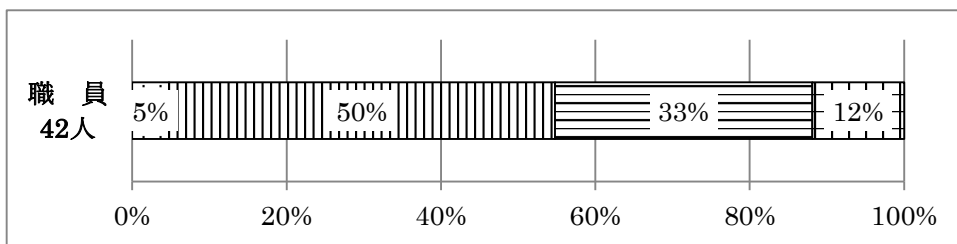
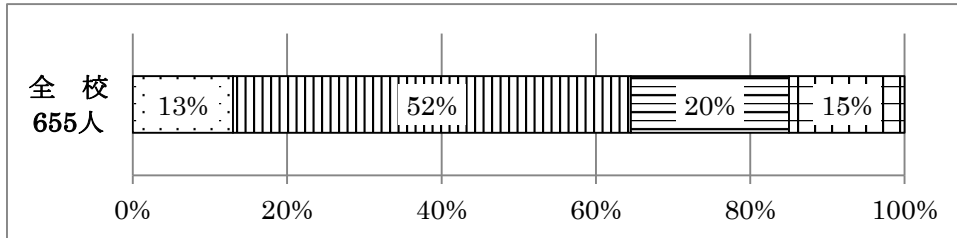
とてもそう思う       だいたいそう思う       あまりそう思わない       全く思わない



・教科教室と兼用するホームルームであるが、多くの生徒にとって、大切な場所として認知されている。

⑥ブロック活動は、楽しいですか。

とても楽しい □ まあまあ楽しい ▨ あまり楽しくない ▧ 楽しくない ▩

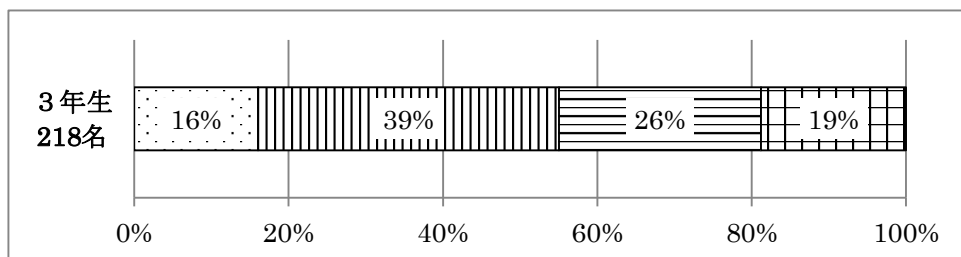
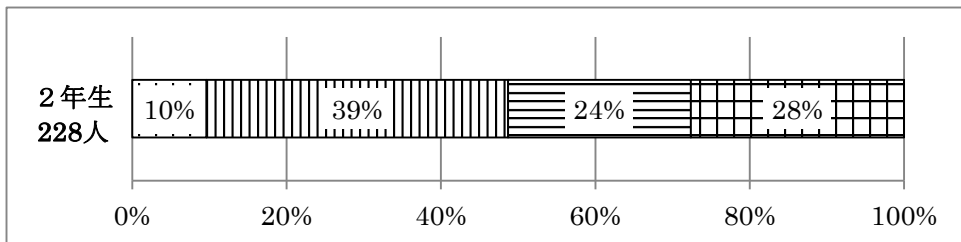
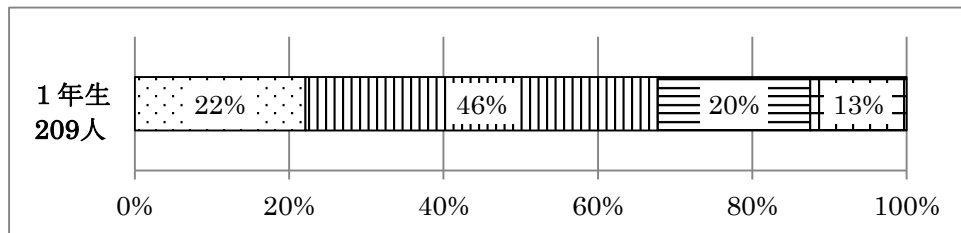
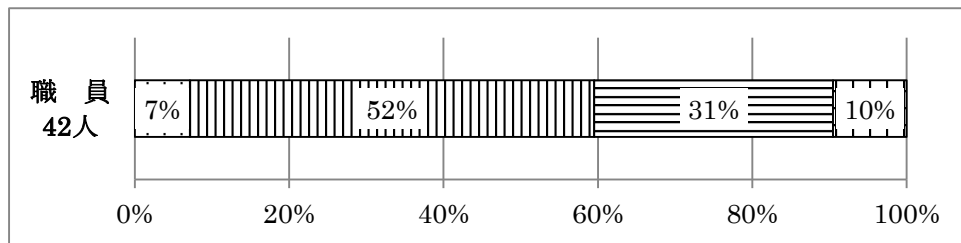
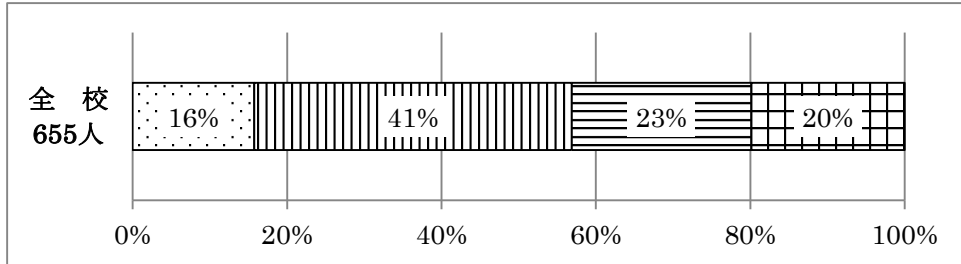


- ・ 6割強の生徒がブロック活動を楽しんでいる。
- ・ 1年生においても、7割が楽しいと感じている。



⑦ブロック活動は、あなたの中学校生活をよりよくするために意味ある活動だと思いますか。

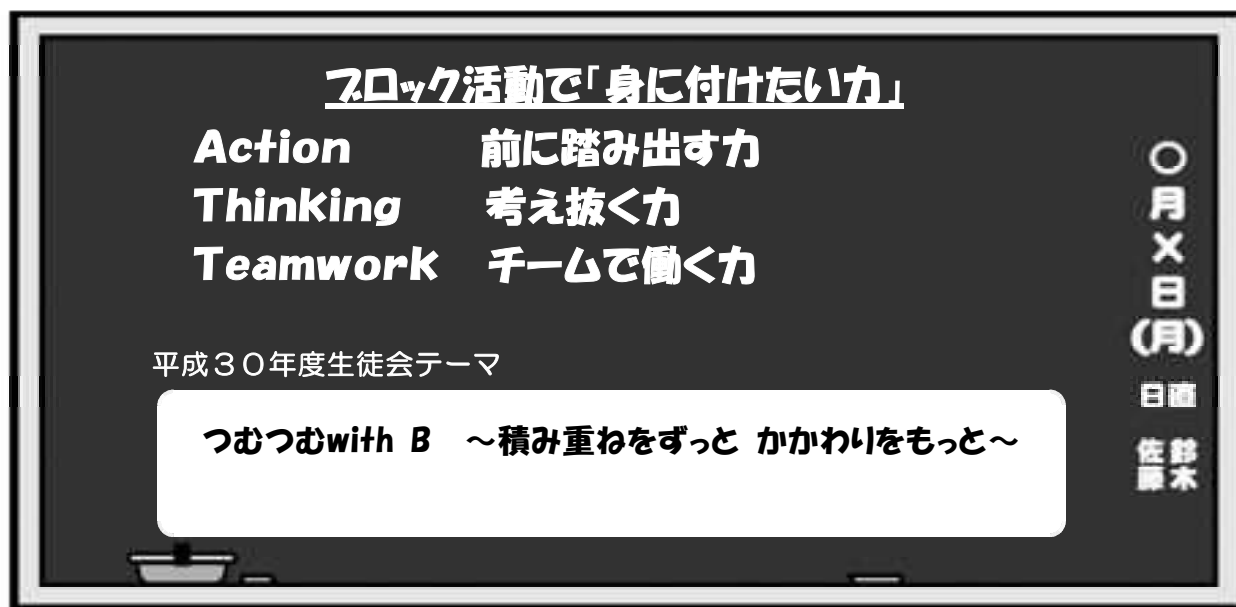
とても思う □    少し思う ▨    あまり思わない ▩    思わない ▩



- ・半数を超える生徒がブロック活動に意味を感じている。
- ・学年が高まるほど肯定的になるという訳ではない。

(このページ余白)

ブロック活動の振り返り用紙



身に付けたい力		1学期	宿泊研修	体育大会	合唱ｺﾝ	2学期	3学期
Action 前に踏み出す力	<b>主体性</b> ブロック活動に進んで取り組む力						
	<b>働きかける力</b> 他人に働きかけ、巻き込む力 目的の実現のために動員する力						
	<b>実行力</b> 目的を設定し、確実に実行する力 目的の実現のために役割を果たす力						
Thinking 考え抜く力	<b>課題発見力</b> 現状を分析し、 目的や課題を明らかにする力						
	<b>計画力</b> 課題の解決に向けたプロセスを 明らかにする力 課題の解決のために準備する力						
Teamwork チームで働く力	<b>コミュニケーションスキル</b> 自分の意見をわかりやすく伝えたり、 相手の意見を丁寧に聴く力						
	<b>柔軟性</b> 意見の違いや立場の違いを理解する力						
	<b>状況把握力</b> 自分と自分の周りのヒト・モノ ・コトとの関係性を考える力						
	<b>規範意識</b> 集団のルールや約束を守る力						
	<b>公共心</b> ブロックために貢献しようとする態度						

3年 組 番

ブロックでの日常生活

ブロックでの係（1学期）
活動内容
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----
掃除への取組（1学期）
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----

ブロックでの係（2学期）
活動内容
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----
掃除への取組（2学期）
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----

ブロックでの係（3学期）
活動内容
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----
掃除への取組（3学期）
身に付いた力に○をつけよう（ アクション ・ シンキング ・ チームワーク ）
-----
-----



#### 4 「ブロックの日」におけるブロック長の説明原稿

下記は、平成31年2月21日（木）大口中学校にて行われた「ブロックの日」におけるブロック長の説明原稿です。

生徒たちは、大口中学校で10年間行ってきたブロック活動を振り返り、ブロック活動を創ってきた先輩たちの思いや願いを確かめ、その価値を後輩の生徒に伝えようとしています。

この発表原稿を読む中で、ブロック活動が、大口中学校の10年間の生徒たちの自治・自浄能力の情勢の場であったことがうかがえます。

\*\*\*\*\*

平成30年度 2月21日（木）

『ブロックの日』 プレゼンテーション原稿 大口中学校ブロック長会

平成20年、大口北部中学校と大口中学校が合体し、現在の大口中学校ができました。当時、大口中学校は「多様な教育に対応できる」「安全で人にやさしい」「環境に配慮した」「地域に開かれた」「情報化に対応できる」学校を目指してつくられました。

新しい大口中学校の制度を作る際、地域の人々の会議により、大学で使用されている「教科センター方式」を採り入れ、生徒が先生に質問しやすい環境が整えられました。

教科センター方式を取り入れている学校では、使用する階段を分けるなど、異学年と交流せずに自分の学年を大切にするという制度がとられていました。大中の従来やり方では、教室移動に無理があるため、ブロック制度が採り入れられました。○福井県の丸岡南中<sup>まるおかのなみちゅう</sup>や至民中<sup>しんみんちゅう</sup>に、ブロック制度の仕組みや利点などを視察しに行くなど、多くの人々の努力によって教科センター方式やブロック制度は大口中学校に採り入れられたのです。

次に、ブロックやブロック長が誕生した背景について話します。もともと、大中にはブロック制度があってもブロック長という役職がないために、生徒会長などの生徒会でリーダーが組織されていました。そこで、大中2年目の秋、臨時の生徒総会が開かれました。

「生徒会の名を失ってもいい。各ブロックでリーダーを作ろう！」この言葉は、大中2年目の、後期生徒会の3年生が言ったものです。受験などで有利と

なる生徒会の名を捨ててまで、大中の伝統や理想を次の年につなげるために、後期のリーダーを2年生に託したのです。「いつまでも、大人から与えられたままではだめだ。」そんな先輩方の強い愛校心から、後期は2年生がブロック長として学校を創り、3年生がその2年生のリーダーを支えて伝統を繋ぐという仕組みができました。

まだ大中の歴史が少なかったころ、学校の伝統を一から作っていく上で、「自治」を意識して様々な活動が行われました。

ブロックで活動をしていく中で、昼間だけいい子ではブロックはまわりません。誰に、どんな仕事を与えたらいいのか。どの人に、どんな長所があるのかを知り、学校での活動で活かすため、3年目のブロック長が提案してブロック宿泊研修が始まりました。

最初はブロックの日という名前でした。4月の始めの一日をブロックの日とし、そのほとんどの時間を会議にあて、よりよいブロックを作るため、試行錯誤して、活動が進められたのです。

生徒自身がブロックで1日を過ごすという活動を提案し、実行するというのは、大変な苦労があったことと思います。先輩方が築いたブロック宿泊研修という素晴らしい行事を、私たちは引継ぎ、よりよいものにしていく必要があるのではないのでしょうか。

現在も行っているブロックが多い「ブロック係活動」は、開始当時、効率的に短期間で大中の課題を解決するために、ひとつの手段として行われていました。他にも、掃除がちゃんとできていないという課題が出れば、掃除について営業している会社、株式会社ダスキンの人を呼んで掃除のやり方を徹底的に教えてもらう「トイレ革命」なども行われました。

みなさんは、ベルマーク運動を知っていますか。当時のブロック活動には、新しくできた北小学校に遊具を買おうために、ベルマークを集める活動がありました。北小の遊具は最終的には町が負担して作られましたが、何万枚と集まったベルマークは、大中のランチルームにある配膳台に変えられました。

平成21年12月17日、校歌披露会が催されました。

ご存じのとおり、大口中学校の校歌は谷川俊太郎さんが作詞、谷川賢作さんが作曲した曲です。

作詞者である谷川俊太郎さんは、17歳から詩を書き始め、21歳の時に初めての詩集「二十億光年の孤独」でデビューしました。合唱曲でもある「信じる」や「春に」など有名な作品を多く手掛けています。はじめに、校歌に込められた想いを話します。作曲者である谷川賢作さんは、メロディーを歌

いたかったのに、卒業した学校でも女性パートがメインの校歌だったそうです。そんな経験から校歌を作るときに、男性パートと女性パートを入れ替えてみようと考え、男性パートがメインの大口中学校の校歌が生まれました。また、息を合わせて素敵な合唱を聞かせてほしいという思いも込められています。次に谷川俊太郎さんからのメッセージをお伝えします。「大口中学校の生徒・先生方が共感をもって歌えるような歌詞を書きたかった。校歌は何世代にもわたって歌いつがれるものだから、卒業後も同窓会などでうたわれることもあるかもしれないと考え、時代によって受け取り方が変わってしまうような言葉は避けるようにした。息を合わせて素敵な合唱を聞かせてほしい。」谷川俊太郎さんが作った、世界で一つだけの大口中学校の校歌です。想いをこめてしっかりと、大切に歌い継いでいきましょう。

最後に初代生徒会の方と実際にお話しをうかがった先輩方のメッセージを皆さんにお伝えします。

初代生徒会の方からは「教科センター方式という珍しい制度がせっかくあるので、ポジティブに考えてこの方式を楽しんでほしい。また通常であれば他クラスとのかかわりが少なくなるが、教室移動でいろんなクラスの子と話す機会が増えたと思う。そういった日常を大切にして貴重な学生生活を送ってください。」とありました。

実際にお話しを伺った先輩方からは動画でお伝えします。(先輩の動画) ○(動画) → ○(動画)

また、この2人の先輩方は、「ブロック制度はみんなに取り組んでほしいことをみんなに託した。当時はみんなが協力してくれたし、みんなで一つのことができたから、ブロックのために頑張ることができた。」とおっしゃっていました。

私たちは去年から、今日のブロックの日に向けて大中の歴史を学び、ブロック制度について深く考えてきました。しかし、3年生は卒業してしまうので、先輩方の強い思いを受け継ぐのは1, 2年生しかいません。これから先何年たっても、成長し続ける「誇れる大口中学校」であってください。

(2年)

先輩方の思いを受けて、私たちなりにこれからのブロック活動について考えてみました。

大口中学校のブロック制度、ブロックの原点とは、異学年と交流することによ



り、生徒みんなでよりよい生活を送り、先生・生徒全員がブロック活動に参加できることです。

また、今年度の生徒会テーマは「積み重ね」でしたが、そのテーマに沿うと雰囲気だけになってしまいがちで活動の幅がせまくなってしまいました。なので、各ブロックの個性をいかした活動を行うために来年度から生徒会テーマが『愛校活動』になります。

ブロック活動は大中に関わる人全員が参加する活動です。そこで四月初めのブロック総合を「ブロックの日」という時間にしました。目的は、皆さんのブロック活動に参加する意欲を高めてもらうこと、また新一年生にブロック活動についてしっかりと理解してもらうことです

「ブロックの日」では、各ブロックで決めた生徒会テーマのサブテーマを発表します。そして、先ほどみなさんに見てもらったスライドを流し、ブロックができた背景や先輩方の想いを確認します。そして、今年度テレビ放送で行ったブロックカラーの抽選をみなさんの前で行います。

一年間のブロック活動の土台となる日にしましょう。

今日の「ブロックの日」で私たちの想いは伝わりましたか。  
先輩方の想いを受け継ぎ、大中に関わる人全員で大中を創り上げていきましょう。

ご清聴ありがとうございました。

(このページ余白)